# 第二章　こどもたちの言葉

1.

腹を立てたひとみは、父親に背を向けて立ち去った。境内ではまだ、騒がしく祭りが続いている。背後で怒鳴る父親がついてこないよう、ひとみは足早に、人混みの中へと入り込んだ。

ひとみは昔から、父が嫌いだった。意味もなく旧弊で尊大で、それでいながら身勝手で幼稚な父親は、今でも会う度にたまらなく不愉快になる。

ただ、今日腹が立ったのはそんなことではなかった。そういうみっともない人間に自分が叱られているところをこどもたちに見られたくないという、ただそれだけのことだった。

――一体自分は、あの子たちにどう思われたいのだろう。

神凪中学に赴任してきて最初のうちは、いかにも先生らしい先生になろうと思っていた。ひとみにとってそういう先生は水垣先生ただ一人だから、水垣先生のように教えようとした。けれど自分がやると先生と違って、半端に偉そうな言い回しに聞こえてしまう。なぜだろうと考えていったらそれは父に影響されているのだと悟って本当に厭になったから、翌日には昔のような友達口調に戻した。

すると今度はずるずると以前のように、こども達と一緒になって遊ぶ近所のお姉さんと大差なくなった。楽しかったけれど、これが先生なのか、という疑問は、いつまで経っても頭の中から離れなかった。

それが果たして、相手がこの島の昔なじみの子たちだからなのか、それとも自分の教師としての資質が原因なのか、ひとみには分からなかった。そんな悩みを抱えながら家に帰ると、女はいつまでも仕事を続けるもんじゃないと父が毎日説教をしてくる。

だからひとみは正直言って、この島を離れるとき随分嬉しかった。この島にいると、何が正しくて何が間違っているのか分からなくなるのだ。そして初めて島外の学校に赴任して分かったのは、問題が自分の教師としての資質にある、ということだった。

学校ではへらへら笑って授業をし、アパートに帰れば澱んだ気持ちを抱

えて落ち込む、ということを毎日繰り返した。相談するにも、島の外に話し相手はいない。実家に電話したところで、自分が残業を終えてようやく時間に余裕が出来た頃には母は家事に忙しく、出るのは酔った父だ。よけい鬱になった。

そうした中で、多少なりとも話を聞いてくれる人にすがるのは、無理もないことだった。

気分を変えようと思って、ひとみは出店でラムネを手に取った。少し考え、こども達の分も合わせて六本を買う。ふと、祭の初めから崇嗣がいなかったことをひとみは思い出し、苦笑した。小さい頃からあの子はいつも、面倒ごとから逃げ出していた。運動会、テスト、郷土についての研究発表、まずすることは崇嗣探しで、隠れ方がワンパターンなのもかわいいものだった。

にやりと笑うと、ひとみは本社の後ろの物置小屋へ直行する。大体あの子は「裏」「陰」「人気（ひとけ）がない」場所なら見つからないだろうと短絡的に考えるのだ。何度見つかってもそれだけは変わらない。成長がないんだから、と独りごち、ひとみは人混みの中で笑った。

暗い社の裏に踏み込むと、ひとみはそこに広がる光景に驚いて、少し後ずさった。

辺り一面が、ぼんやりと霧に包まれていた。どこかで小火（ぼや）でもあったかと思うほどで、その霧は神社の裏手、山の木々の間から際限なく洩れ出で続けているようだった。ひとみはしばらく茫然として、そこに立ち尽くす。けれどすぐに、何も怯えることはないと思い直して、物置小屋へと向かった。案の定、昼間に閉めたはずの南京錠が空いていた。

中をそっと覗き込むと、奥の方からぼうっと光が漏れていた。入り口にラムネの瓶を置き、中に入ると足音を立てないようにしてひとみは進んだ。一番奥、大きな木箱と木箱の隙間に、崇嗣は背を向けてしゃがみ込んでいた。

じっと下を向いて、どうやらゲームをしているようだった。さっきの光は、液晶のバックライトだろう。まったくこちらに気付いていない。ひとみはニッと笑みを浮かべた。

腰に手を当て、息を思い切り吸い込み、ひとみはあらん限りの声を出し

た。
「たァかしッ」
崇嗣は飛び上がってひっくり返り、頭を打ってゲームを落とし、わめき声を上げて這いつくばいながら逃げ出す、はずだった。
しかし、崇嗣は無反応だった。
ひとみは口をへの字に曲げる。こんな肝の据わった子ではなかったはずだ。
念のため、もう一度怒鳴りつける。
「たかしっ」
それでも、崇嗣は動かなかった。
どうせイヤフォンでも着けてゲームをしているのだろう、とひとみは肩を竦めた。そしてゆっくりと手を崇嗣の肩に近づけると、いきなりぽん、と叩いた。
すると崇嗣は期待通り、飛び上がってひっくり返り、頭を打ってゲームを落とし、這いつくばいながら逃げ出した。ひとみはそれを見て、手を打って大笑いした。
しばらくしてようやくバックライトの光で犯人に気付いた崇嗣は、息荒く肩を揺らしながら立ち上がり、ひとみを睨み付けてきた。上下とも神主さんとよく似た、白い直垂に袴を身に着けている。せっかくの礼装ももう埃まみれだった。怒った顔をして、崇嗣はこう言った。
「　　。　　」
「え、なに？」
ひとみは笑い続けていたので、よく聞き取れなかった。しかし崇嗣はそれには答えず、むっつりした顔でゲームの電源を切った。
物置小屋から出るとひとみはすぐに、置いておいたサイダーを崇嗣に渡してやった。うつむいたまま、崇嗣はラムネの栓を開けた。くすくす笑いながら、ひとみは尋ねる。
「で？　今日もまたサボり？　あのさあ、おじいさんだってきっと崇嗣君に手伝ってもらうの楽しみにしてると思うよ。ねえ、聞いてる？」
しかし崇嗣は何を言っても、黙々とラムネを飲んでは辺りを見回すばかりだった。仕舞いには、ひとみに背を向けてしまった。どうも濃霧に驚い

ているらしいが、ひとみは少し妙に思った。
再び崇嗣の肩を叩く。するとひとみの方に向き直り、崇嗣は言った。
「　　、　　」
ひとみは首を傾げた。
じっと崇嗣の顔を見る。崇嗣はあたかも、なにかを話しているかのように口を動かした。その舌の動きや喉仏の上下にまで、ひとみは目をやる。
けれど、何も聞こえてこなかった。
そして、ひとみはまたにやけた。新手のおふざけなのだろう。負けてたまるかと思った。
「へーえ。高校生にもなってまだそんなこどもっぽいことするの。ふーん」とりあえず挑発してみる。「そりゃ手伝いも面倒かも知れないけど、君だってもう高校生なんだしさ」
しかし崇嗣は、ただ怯えたような目をして、ひとみを見つめているきりだった。
ひとみは言う。
「何、どしたの？」
崇嗣は言う。
「　　」
ひとみは、黙った。

2.

四人の先頭に立って、陽は石段を駆け下りた。
すぐ後から齋夜、そして健太に弥生が来る。目の前はどこまでも続く霧、その中にぽつんぽつんと定期的にぼんやりとした光が現れ、それが間近になると提灯の形を取っては背後へと消えていく。神社からは太鼓や笛や鐘の音だけが、自分たちに追いすがるようにしてうつろに響いてきた。
下り終え、石段の前に立つ。普段なら視線の真っ直ぐ先に家々、そして海が見えるはずである。しかし今は霧で覆われていて、見えるのはすぐそこの家の屋根だけだった。陽は荒い息を整える。
明らかに状況がおかしかった。

陽は混乱した。

「陽」荒く息を吐きながら、齋夜が話しかけてきた。「どうする？」

「とりあえず」何も考えないまま、陽は話し始める。「近場で集まって話し合える場所へ行こう。齋夜の家、大丈夫かな」

齋夜は頷き、四人は歩き出す。健太と弥生は、さっきから青い顔をしたままで何も言わない。齋夜はいつも、小さい頃から陽が何か言えば、袖にすがるようについてくる。だから、四人は黙って霧の土手を歩いた。

歩きながら陽は思う。

ひょっとして今、自分は後先考え決断して話しているように見えるのだろうか。外見上は落着いているように見えるだろうが、陽は自分の中がいつも混沌としていることを自覚していた。窮地に陥るといつだって陽の頭の中は、考えが蜘蛛の子を散らしたように四方へ離散していく。まさに今目前にある霧のように曖昧な、考えとも言えないなにかが漂っているだけだった。

実のところ、これから齋夜の家で何を話し合えばよいのかも、まったく見当がつかない。ただ、齋夜に訊かれたからなんとなく答えてみただけだった。けれどこの調子だと、今後も自分がこの三人を仕切ることになるのだろう。

昔から、みんなで遊んでいるときも、小学校でも中学校でも今の高校でも、こんな調子だった。尋ねられるととりあえず当を得たようなことを話すから、不思議と頼られてしまう。

こんなことでよいのだろうか。いつの日か大変な目に遭うのではないだろうか。陽はたまにそう思う。けれど同時に、まあそれでも構わないだろう、とも思ってしまう。そうなったらそうなったでまたそれらしい適当なことを話して、また頼られるのだろう。大した問題ではない。自分の根の部分に、こうした破滅的な発想が備わっていることを陽はいつも感じていた。

そしてきっと齋夜も、そういう人間だ。

やがて、齋夜の家に辿り着く。

懐かしい齋夜の家の居間に通された。四人は揃って、畳に座った。

「隣でおばあちゃんが寝てるから、静かにしてね」

齋夜がぼそりと言った。
皆、黙ったままだった。
「最初はね」
弥生が珍しく、自分から切り出した。
「井戸のおばさんと話してたの。あんまり真剣に聞いてなかったんだけど。それで、気付いたらおばさんの声が、ちょっとずつ聞き取れなくなってて」
「俺も」健太が元気のない声を出す。「お袋がケース運べだの勘定しろだの言ってるのが、ブツ切れになってった」
「俺は、喋ってた兄貴がそういう風になっていった。最初は酔ってふざけてるのかと思ったけど、兄貴にしては凝りすぎてるし」
そこで陽は齋夜を見た。「齋夜は」
「ぼくは」
そう言うと、齋夜は少し間を開ける。
「分からない。いつの間にか」
そして黙った。
陽は、齋夜がなにかを隠したと感づいた。理由は分からないが、もしかすると齋夜自身も、なぜ隠したのか自分で分かっていないかも知れない。齋夜は小さい頃からよくそうやって、気分に従い意味のないことをするのだ。とにかく、今訊いても何も応えないだろう。
――さて。
――何を話せばいいだろうか。
思いつくままに、陽は口にしてみることにした。
「ともかく、いたずらなんかじゃないな」
「あーなんなんだよもうッ」陽の言葉を聞いて、健太がこらえきれなくなったかのように叫んだ。「俺らが何したっていうんだよ」
「健太静かにして」齋夜はすぐに言う。
「でも、なんでなんだろうね」弥生が呟いた。「私達だけ」
「俺たちだけかどうかは分からないよ、崇嗣を掴まえてみないと」自分でも意識しないほどふいに、陽は返事した。「それに問題は『なぜ』じゃなくて、『どうする』だろ」
弥生はうん、と小声で言って、頷いた。

妙に説得力があるな、と陽は自分で言っておいて思った。
陽は齋夜を見る。さっきから不思議なほど、齋夜は無表情のままだった。何を考えているのだろうか。それともなにか、こうなってしまった理由を知っているのだろうか。しかし、齋夜を問い詰める気は起こらなかった。
陽は言う。
「で、どうする？」
また皆無言になる。三人とも、実のところ思考停止状態だろう、と陽は冷めたことを思う。
「帰る、か？」
健太がぽつ、と言う。ひどくあっけなく響いた。陽は尋ねる。
「なんで」
「いや、あれ、なんかの間違いかも知れないし」下を向いて顔を見せないまま、健太はぼそぼそ言い続けた。「今戻ったら、もうなおってる、かも知れない、し」
確実に逃避だったが、少なくとも弥生は同意したようだった。確かにこのまま四人で膝を突き合わせて悩んでいても、何の変化もない。それよりはましだと思ったのだろう。けれど、あの強烈な光景が「何かの間違い」ということは決してありえない。いや、もちろん何かが間違ってしまった結果であろうことは確実だが、自分たちにどうできるものでもなかった。
所詮、流されるしか道はない。
陽はそう思った。
「じゃあ、帰ろうか」
そして陽は息を吐き、あえて明るく言った。
「もう九時半だし、神社に着く頃には祭り終わってるよな。直接家に帰るか」
「うん」弥生が呟いた。

玄関で下駄や草履（ぞうり）を履いてから、皆顔を見合わせる。
「なんかあったら、連絡取り合おう」陽が言った。「どうするかな。この家に来る、か」
「電話は？」

健太が弱々しく言う。陽は首を振った。
「まずいだろ。俺らが出ればいいけど、おとなが出たらお互い無言電話じゃないか」
「電話も、駄目かな」弥生が問う。
「まあそれも分からないけど。でも直接会った方が、いいような気がする」
特に根拠もなく、陽はそう話した。「齋夜、またここ借りても、いいよな」
「うん」
また無表情のまま、齋夜は応えた。
陽は疑問に思う。こんなに喋らない性格だったろうか。以前はもっと、せっぱ詰まったときでも少しずれた変なことを言って、場を和ませていた気がする。いつも齋夜は、仲間はずれにされるのを嫌がって、話すのが苦手でも一生懸命参加しようとしていた。
しばらく会わなかったから自分が思い違いしているだけで、元々こういう風だったろうか。それとも自分がいないうちに、齋夜は変わったか。
――それは、自分のせいだろうか。
陽は玄関の引き戸を開ける。外は真っ暗な上に、家の明かりを受けた霧が真っ白に光り、ほんの少し先までしか見えない。
「帰れる、かな」弥生が不安な声で呟く。
「ま、だいじょぶだろ？　見えないこともないし。この島の道だし、迷うこともないだろ。たぶん」健太が空元気を出して言った。幾分、声が引き攣っていた。「橋のところまでは、三人一緒で行けるよな。そこからなら、弥生ちゃん帰れるか？　なんなら俺、送ってくけど」
「ううん、大丈夫」
「じゃあ、みんな、何かあったら無理するなよ」
陽は言う。そして付け加える。
「齋夜も」
「うん。じゃあ、みんな、気をつけて」
心ここにあらず、といった声で齋夜は言った。しかしそれに、健太も弥生も気付いていない。陽はわずかに、眉を顰めた。
ごまかした不安を胸に抱いたまま、陽は齋夜の家を後にした。
霧の中目を凝らし、道がどこへ続いているか、前に何があるかを思い出

しながら、陽と後に続く二人は先へ進む。まだ今のところ、かろうじて足を前に進めることが出来た。しかし、足は震える。

陽は振り返り、齋夜の家を見た。

霧に包まれて、もう見えなかった。

3.

十時になり、恙なく祭は終わった。終盤は例年どおり、踊る酔いどれで境内が一杯になり、ぐだぐだの雰囲気のまま、これといった切れ目もなく、飾り付けが撤去されていった。

――いや。

――本当に昔から、こんなだったろうか。

神主の 研信蔵（こだましんぞう）は手近の椅子に腰を下ろし、片付けの様子を眺めながら深くため息をついた。

年々祭りに来る島民の態度は悪くなってきている。祝詞を聞く者など誰もいない。自分がこどもの頃には、皆神輿が始まるまでは神妙な顔をして、父の祝詞とお囃子に耳を傾けていたものだった。それが自分が継いで以来、歯止めが利かなくなり出した。いつから巫山戯るべきか、どこまでやっていいのか分からない者が、増えてきたのだ。楽しければそれでいい、と考える輩ばかりになった。

結果、神輿は境内をわいわい騒いで担ぐだけのものになり、囃子方の人数は減り、お稚児様の齢も七つを超しても気にしなくなり、祭りの支度も雑になった。そして今年は、お稚児様すらいない。

暗澹たる思いで信蔵が腰掛けていると、へらへら笑いを浮かべて町会長が近寄って来るのが見えた。信蔵はうんざりした調子で言った。

「なんですかな町会長さん」

「まあまあまあ、そう厭な顔をなさらずに。いやあお疲れ様でした。今年もつつがなく終わりまして。よかったよかった」

「ご用件を」

「ああはいそうですな。ちゃっちゃと済ませましょうちゃっちゃとね。ええとですねえ、この祭り、さくら祭ですが、年々こう、規模が小さくなっ

たというか、どうも我々がこどもの頃と比べて盛り上がりに欠けるというか、そういう風になってきたでしょう」

手前がそうしているのだろうが、と内心信蔵は毒づいた。

「お稚児さんになるこどももおりませんし。それでね、研さん。私ぁ思うんですがね。そろそろ、このお祭りも潮時じゃないかな、と」

「はあ？」

信蔵は愕然として町会長の顔を見た。座興話のような軽い口調で、町会長は話し続ける。

「さもなきゃ一気に中身を変えて、なんですか、リニューアルですか。観光客をこうぐぐっと呼べるように変える、と。悪くないと思いますよ、私はね。何せ今のまんまじゃ、島のもんだって来ないでしょう。やる意味がないと思うんですがね。町内会の予算だって苦しいもんで、祭りに使う余裕がないと言いますか。ですからね、人が来ないまま祭りを続けるくらいなら、ひとつこうすぱっと潔く諦めて、もっと地域振興に役立つ方向へ金や人材を回した方がいいんじゃないか、と私思うんですわ。中身変えるとすれば例えば、よその人が来てみようかなーと思うようなものに、そうですな、恋愛成就とか？　合格祈願なんてのもウケがよろしいでしょうなあ。御利益だお守りだ、作って売って、ね？　どうですかね研さん。お宅も、何かと大変でしょう。失礼ですけども、結構なお年でしょうし。息子さんも、ねえ。まあその、色々あって」

そう言って町会長は、下卑た笑みを浮かべた。

「お孫さんも、プレッシャーと言いますか、感じとるんじゃないですか？

今の若い子らはこういう辺鄙な島に、引きこもりたくはないでしょう。私らみたいな年寄りがああだこうだ押しつけるのは、かわいそうな気がしますけどねえ」

そこが、堪忍袋の限界だった。

「馬鹿なこと言うちゃあいかんっ、調子に乗るんも大概にせいッ」

立ち上がるなり、信蔵は怒鳴りつけた。飛び上がった町会長は、ああまあご一考下さいね、と裏返った声で言って、一目散に逃げ出した。

再び大きくため息をついて、信蔵は腰を下ろす。胸の動悸が苦しい。島の悪ガキを叱りとばしていた頃とは、もう違う。

そして落着いて考えると、次第に分からなくなった。軽薄な口調だから腹も立つが、もしかすると町会長の言うことは、正論かも知れない。島が大変な勢いで寂れていっているのも事実だ。過去や伝統にしがみついて後の世代に何も残してやれないのでは、却ってその方が島のためにならないともいえる。冷静に考えれば、彼の提案もそう悪いものではない。

ならば。

――自分は、何を畏れているのだ。

目前で酔った島民たちがわいわい言いながら、先ほどまで信蔵の立っていた舞台の飾りや、高い櫓から吊された提灯を降ろしている。材木を組んで作られた櫓などの大物は、酔漢に任せると何があるか分からないので、明日以降に片付ける。ぼう、と信蔵はその様子を眺めていた。もう、この光景を毎年見て、七十年近くになる。色々あったが、ずっと変わらずに続いてきた。

――これで、最後か。

「神主さん」

急に耳元で声がして、信蔵は驚く。顔を向けると、それは妙に切羽詰まった表情を浮かべた、珠川の娘さんだった。

「おお、ひとみちゃんか。いや、もうちゃん付けするのも失礼かな。珠川先生だ」

「いえ、嬉しいです」

彼女は懐かしそうな笑みを口元に浮かべた。そして、真剣な顔に戻ると言った。

「あの、神主さん、ちょっとお話が」

「ん。何かな」

ひとみはおもむろに後ろを振り返る。しかし目当てのものがいなくなっていたらしく、あれ、と声を上げた。彼女が辺りを見回すのにつられて信蔵も見ていると、少し向こう、本社の柱の陰に、見慣れた顔のこどもが隠れていた。

「あ、あの馬鹿もん」

信蔵は席を立ち、止めるひとみを振り切って走り寄る。そして、逃げだそうとする崇嗣の襟首を掴まえると、叱りつけた。

「お前は本当に進歩がないな。毎年嫌だ嫌だと言っとったら済むとでも思っとるんか。え。すぐどっか消えおって。今日も直前までおったのに、いざ始まると都合よく、ぷいとどこかへ消える。なんだその顔は」

崇嗣はいつものような、何を言っても変わらないふて腐れた顔ではなく、信蔵を見て心底怯えた表情を浮かべていた。信蔵はふと、もう四十年近く前に、まだ小さかった息子を叱ったときのことを思い出した。無性に懐かしくなる。

ひとみが駆け寄ってきて、間に割って入った。

「あの、神主さん違うんです、その」

「いいやひとみちゃん、よう見つけてくれた。こいつの根性はもう、どうしょうもない。儂が小さい頃から言い続けてもまぁだ聞かん。いい加減たたき直してやらにゃ。いい、いい。もういい。このまま家に引っ張ってって、説教だ。明日にはこいつの親も帰ってくるからな。そっちにもみっちり言ってやらにゃいかん」

そして崇嗣の襟を掴んだまま、信蔵は境内を横切って石段へと向かう。後ろからひとみが何かを言っていたが、たちまち喧噪に紛れて聞こえなくなった。

人混みの中、崇嗣を引いて歩いているうち、信蔵は少し妙な気がした。普段こんなことをすればこの子は、こましゃくれた言い訳を言ってはよけいに自分の怒りを買っているのに、今日はやたら静かで、不気味なほどだった。

さすがに何かあったかと不安になって、憎まれ口を叩くような口調で訊いてみた。

「何だ、妙におとなしいな、どうした。何か言うことでもあるか」

すると、崇嗣は言った。

「　　」

「はあ、何て言った。聞こえん」

周りがうるさい。そして信蔵も、近頃は耳が遠くなってきた。

すっかり老いてしまった。

首を振り、信蔵は崇嗣を引きずりながら、石段を目指して歩いた。

4.

「じゃあ、ここまでだな」

健太は言った。三人してもうもうとした霧の中を歩き、橋までようやくたどり着いた。普段の二倍近くかかっただろう。道中、ほとんど誰も喋らなかった。

ここで、健太は橋を渡って商店街の中にある眞田酒造へ、弥生は渡らず右に折れて学校の近くにある家へ、そして陽は橋の近くにある診療所へとそれぞれ帰る。

それでも歩いているうちに、ずいぶん三人とも余裕が出てきたようだった。健太は弥生に言った。

「弥生ちゃんホントに大丈夫か？　家まで遠いだろ。送ってやろうか」

「いいよ、平気」少し笑って弥生は応えた。「だいぶ慣れてきたし。遠いって言っても、大したことないから」

健太は、思い直したように言ってみた。

「もう、さっさと寝よう。寝たらなおるよ、きっと。うん」

すると二人は、目をそらして小さく頷いた。空しく聞こえることは健太も分かっていたが、それでも言わずにいられなかった。そして健太は、二人と別れて家に向かった。

たった一人で、健太は異様な霧の中を歩く。ほんのしばらく歩いただけでもう、さっきまで一緒だった二人は気配すら感じられなくなった。更に夜だから、不安は途方もなく大きくなる。溜息が漏れる。

実を言えば健太は人一倍、臆病だった。

月はどうしたんだろう。健太は空を見上げた。来たときも、こんなに暗かったろうか。曇っているのか。見上げた先には星すら見えない。見当をつけてそろりそろりと道の脇へ寄ると、思っていたのとまったく違う家が現れる。全然進んでいないじゃないか。急に心細くなる。

足がすくむ。

前に進めない。

助けて欲しい。

でも誰もいない。

足が動かない。
怖い。
小さい頃からとにかく恐がりで、夜一人で便所にも行けなかった。古い日本家屋の眞田酒造がひときわ怖かったこともあるが、そんな理由でしょっちゅうおねしょをしていると父親に叱られる。そんなことでは強い男の子になれないぞ、と何度も言われた。
でも、何と言われようと怖いものは怖い。
真夜中の廊下は吸い込まれるような闇でいっぱいだったから、足を踏み入れれば何が居るか、何が在るか、分からなかった。けれど、父に叱られるのも怖かった。そうして廊下におしっこを漏らして夜中に泣いていると、父も母も職人たちも起き出してくる。かばってくれる母、ため息をつく父、笑う中年の職人たちに、幼い健太はいつも傷ついていた。
だから、外では強い男の子になろうと思った。明るいうちは怖いものなどなかった。走り回って終日遊んで、島の子たちの中では誰にも運動は負けなかった。負けないように頑張ったのだ。テレビで見た野球選手にあこがれて、父と一緒にキャッチボールをして遊んだ。上手に出来ると初めて父に褒められた。それで野球選手を夢見た。強くて男らしくてかっこいい野球選手になれば、もうお母さんを困らせない。お父さんに呆れられない。職人のおじさんに笑われない。つまるところ、それだけの夢だった。
けれどやっぱり、怖いものは、怖い。
先の見えない道は、怖い。
あちこちに立っているはずの松明も見あたらない。もう消して廻っているのだろうか。それとも霧で湿って勝手に消えたのだろうか。歩いても歩いても、暗い霧が続くばかりだった。
照らすものは何もない。
もうもうとただ、霧が続く。
何も見えない。
怖い。
手探りのまま、健太はあてどなく家路を歩き続けた。

5.

宗像敬一郎は、家で一人晩酌をしながら息子たちの帰りを待っていた。彼の相手にうんざりして、妻は早々に寝ている。敬一郎は酔うと、とにかく鬱屈した愚痴をしつこく言い続けるたちだった。

敬一郎は成人して以来、一度も島の祭りに行ったことがない。田舎者が集いも集ってくだらないことを飽きずにやっている、と心底から馬鹿にしていた。しかし今となっては、そんなことはおくびにも出さない。嫌でもこの島ただ一人の医者なのだ。嫌われては商売にならない。

昔は敬一郎も、堂々とそうした自分の意見を口にしていたものだった。父親が島民皆から好かれ、島の行事にことごとく参加しているのを見ては、鼻で笑っていた。こんな離島でちまちまと爺婆の治療をしたところで高が知れている、自分は東京で医学部に残って学び、ゆくゆくは付属病院の院長を目指すのだ、と真剣に意気込んでいた。「偉い医者」になるのだ。

美しい妻も手に入れ、長男の春文も出来、自分は仕事に励んだ。こどもの夢のような分かりやすい目標も、あながち遠いものではなくなった。跡は継がないと帰省の度に公言しても、父は不平一つ言わなかった。そうかそうかと笑って頷いた。それがよけいに腹立たしかった。苛立たしさを動力にして、彼は仕事に没頭した。

そのしばらく後、敬一郎は些細な失敗で立場を失った。

絶望して戻った彼を、父は普段と変わらない調子で受け入れてくれた。黙々と、父の手伝いを続けた。妻はのんびりした島の生活の方が気に入ったらしく、幸い文句は出なかったが、疑心暗鬼に駆られた敬一郎はそれが逆に不安だった。こんな島で一生過ごすような小さな男だと思われたくない、そんな気持ちに囚われていた。

次男の陽も生まれた。けれど自分はもう、敗残者だとしか思えなかった。島の人々から若先生と呼んでもらえるようになったが、空しく笑いかえすことしか出来なかった。所詮「若」先生、自分は父親の存在の下で認められているに過ぎないのだ。だから、自ら嬉々として浴衣を着込み、幼い陽の手を引いて楽しげに祭りへ向かう父に付いていくことなど到底出来なかった。

そして今、父が死んでから二年ほど経ってなお、その呪縛から逃れるこ

とが出来なかった。
春文を見ていると、過去の自分をそのまま見せられるような気がしてやるせなくなる。粋がって虚勢を張るが、中には何もない。だから張り子を失うと虚無になる。自分のようになる。あの子が将来どうなるか、親として相応しからぬ考えをめぐらして、敬一郎は卑屈に笑った。そこまで考えてふいに、彼は陽のことを考えた。そして首を傾げる。
――あの子は、いったい。
玄関の開く音がした。
帰ってきたのは陽だった。少し下を向いたまま、すたすたと何も言わずに居間を通る。そしてちら、とこちらを見た。赤ら顔の敬一郎は、気もなく伝えた。
「陽、めしはもういいのか。お母さん一応作っといてくれたらしいぞ。台所に」
すると陽は一瞬立ち止まり、話す敬一郎を見てしばらく何も言わなかった。が、やがて歩きながら乱暴に首肯して、部屋を横切っていった。敬一郎は憤慨する。
「何だ、親に向かってその態度は。おい。陽。ちょっとこっち来なさい。陽。聞こえてるのか」
しかし、陽はそのまま戻って来なかった。台所を通り過ぎ、どうも風呂場へ向かったらしい。酔った勢いで久々に偉そうな口を利いた敬一郎だったが、たちまちにやる気が萎えた。また一口、ビールを飲んだ。
しばらく経って、再び玄関から、今度はばたんと派手に人が倒れる音がした。さすがに敬一郎も、立ち上がって見に行った。
上がり口に、泥酔した春文が力なく倒れていた。その横には、同じく真っ赤な顔をした男が立っている。春文の幼なじみの岩倉脩一だった。こちらはまだちゃんと話せた。
「どうも」
脩一がぼそりと言う。昔から寡黙な男だった。
「また調子乗って飲みまくったので。連れてきました」
「あああありがとう。悪かったね」
「いえ」

そのまま去ろうとして立ち止まると脩一は言った。
「あ、親父のことまたお願いします。若先生」
そして玄関から出ると、脩一はドアを閉めた。また敬一郎の頭に血が上る。
――俺はもう若先生じゃない。
敬一郎はしゃがみ込み、乱暴に春文の頬を叩きながら、起きろ起きろと言った。すると、小さくうなり声を上げてから、春文は急に怒鳴った。
「あーきらッ、陽どこ行ったっ、俺を馬鹿にしやがって、クソが」
敬一郎はため息をつくと、無理矢理春文を起こして肩から支え、居間へと引きずっていった。その間も息子は、あきら、あきら来いこら、とつぶやき続けている。細腕を振り回し、みっともないことこの上ない。どうにも三十年前の自分にそっくりだった。敬一郎は厭気がさす。
加減も知らずに鯨飲して、大方人と張り合ったのだろう。人から何と言われることか。仮にも医者なのだから、その程度の判断くらい付かないのか。言いたいことはいくらでも思いつくが、自分の過去を思い出すと、敬一郎は何も口に出来なかった。
ソファに寝かせて少し水を飲ませると、やっと頭が回り出したらしく、春文はまたわめきだした。
「おやーじ、陽。どこ。あいつ俺シカトして逃げやがって。くそぅ。ちくしょう。馬鹿にしやがって。せっかく俺が酒教えてやるっつってんのに」
「教えるも何もないだろう。そんだけ酔っぱらって」
「うるせウルセうるせ。親父が俺に説教すんな」そしてドンドンと地団駄を踏む。「陽来い陽、俺を馬鹿にすんな、俺を」
「静かにしなさい、お母さんはもう寝てるんだから」
敬一郎はもう腹も立たなかった。春文が神社でどんな行動を取ったかも、今何を考えているかも、手に取るように分かる。そして、分かることにうんざりする。
しばらく春文をなだめていたら、やがて湯気を上げた陽がパジャマを着て風呂から出てきた。台所から持ってきたコップに、黙って麦茶を注いでいる。敬一郎は、陽の顔をじっと見た。しかしいくら見つめ続けても、この子の表情からは何一つ読み取ることが出来なかった。母親に似た整った

顔が、無表情のまま何も言わずに茶を飲み干す。何を思っているのか、分からない。

だから敬一郎は、無意識のうちにいつも陽を疎んじていた。

――自分には、この子が分からない。

するとその時突然、春文はソファから起き上がった。敬一郎の手を振り払い、陽に近寄る。

そしてやおら陽の胸ぐらを掴むと、喚き散らした。

「おい陽、お前俺のこと、馬鹿にしてるだろ。せっかく俺が大事なこと教えてやろうとしてんのに、お前いつの間にかふいっといなくなって、勝手なことしやがって。何なんだよ、いつも澄ました顔して。ムカつくんだよ。俺はもう社会人なんだぞ。働いてんだ、給料だってもらってんだよ。お前なんか、バイトだってしてないだろ。なのに何でそんな態度がデカいんだよ。俺の方が働いてて、偉いんだぞ。おい。聞いてんのか。おい。何か言えよ。おい」

その間も、陽は無表情のままだった。いや、何か表情を浮かべているのかも知れないが、だとしてもそれは自分には理解できないだろうと敬一郎は思った。そうして自分の限界を悟っているだけ、敬一郎の方が春文よりましだとも言えたし、むしろ終わっているとも言えた。

敬一郎はからまれている陽に、何もしてやらなかった。なぜか身体が動かなかった。何をすべきなのかも分からなかった。何もせず、ただ傍観しているだけだった。そして、自分がなぜ動けないのかも、分からなかった。息子二人を眺めて、敬一郎は肘をついたままビールをちびりちびりと飲んでいた。そうしながら彼は、ゆっくりと心が腐っていくような気がしていた。

胸を掴まれたまま、陽は何も抵抗せずじっとしている。顔をゆっくり動かして、兄と父を交互に見ている。

不意に、陽は春文の手を払いのけた。

そして息を吸い込むと、大変な剣幕で怒鳴りだした。

「　　、　　。　　」

その姿を見て、敬一郎はその場で目を見張った。

――なんだ、これは。

陽は口を開くだけ開け、顔も紅潮させている。はだけたパジャマの胸も気にせず、兄に指を突きつけ、半ばつかみかかるようにして更にこう言った。

「　　、　　。

　　」

何が起こっているのかまったく分からず唖然とする春文を尻目に、陽はもう一歩前に踏みだす。今度は敬一郎の方を向いて、大声を出した。

「　　、　　」

敬一郎は、形の見えない猛烈な不安に襲われた。

こんな風に感情をむき出しにする陽の姿は、今まで一度として見たことがなかった。けれど今にいたって初めて見る陽の怒りは、全く理解不能のものだった。

明らかに何かを言っている。それなのに、何も聞こえてこない。

――なんだ。

――何が言いたい。

けれど、陽の声は敬一郎には届かなかった。

激昂した陽は、どんどん敬一郎の方へ詰め寄ってくる。

ずっと、敬一郎には聞こえない言葉で叫び続けている。

敬一郎はビールの残ったコップを握りしめたまま、微動だにできずにいる。

「　　、　　、　　、　　、

　　」

そして最後に陽は、まっすぐ敬一郎の眼を見て言った。

「　　」

言い終えると陽は、息をついた。

また、無表情に戻った。

動けなくなった父と兄をそのままにして、陽は居間から出て行った。自室へ向かって、とんとんと階段を上がる音が聞こえる。

敬一郎は一人、取り残された。

6.

祭りの翌朝、弥生は部屋のベッドで目を覚ました。窓の外から日差しはない。今日も曇天らしかった。ゆっくりと身を起こす。

そして思い出す。

あれは、夢だったのだろうか。

弥生の父は建築家をしている。弥生は、彼が四十半ばを過ぎてからの一人娘だったから、ずいぶん大切に育てられた。若い内に十分成功してのち妻と共にこの島に越してきた人で、のんびりと日々を過ごしつつ設計の仕事をこなすだけで充分事足りていた。そんな中で生まれた初子だったため、幼い弥生が部屋へ行くと、仕事も放り出していつまでも嬉しそうに相手してくれたものだった。

しかし、そんな父ももう、六十を過ぎた。

髪もすっかり白くなり、顔には皺が目立つようになった。

小学校高学年くらいの時、弥生は自分の父が友達の親よりも年齢が高いことに気付いて、父親に尋ねたことがある。その後父が気に病んでいるのを目にしてからは、弥生は何も言わなかった。

そしてそのことが理由がどうかは分からないが、高校に進学した辺りからしきりに結婚のことを、主に母から言われるようになった。

弥生は最初何かの冗談だと思っていたが、どうやら真剣な話のようだった。母はまだ四十代だから、そこまで急ぐことはない。父を早く安心させてやりたい、という母の気遣いだろう。昨日の井戸さんの話も、その類だった。

弥生も父を、自分のことで心配させたくないとは思う。高校選びの時でさえ、父はさんざ気をもんでいたのだ。無論悪意あってのものではない。昔の習慣や道徳観に従っているのでもない。純粋に父は自分のことを大切に思い、心配して言ってくれている。それがよけいに、弥生にとっては心苦しかった。

難しいのは、拒否する理由が見あたらないことだった。弥生自身は、別段これといって何をしたいというわけでもない。ピアノを弾くのが趣味ではあったが、それも仕事にしようなどと大それたことは思っていない。ビ

ジネスにばりばりと打ち込むような柄では、もちろんない。
だからといって、誰かの妻になって主婦になる、というのも実感が湧かなかった。というより、よく分からなかった。そうすべきでない、という理由がなかっただけで、是非を判断する材料もイメージも、弥生の中にはなかった。
ただ、高校の教室で本を読みながら他の女の子たちを見ていると、結婚などというものが全くの別世界のもののように思えてくるのだ。今こうして毎日何となく授業を受けながらお喋りをし、笑い、はしゃいでいるこの現在が、誰かと結婚し家事をしながら生涯を過ごすという将来と直結しているとは、どうしても思えない。どこか遠いところにぽつりと置いてある、自分とは無関係なもののような気がした。その感覚だけが、母親の言うことに疑問を感じさせていた。
どうせ逃げようのないことだ。早いか遅いかの違いだけなのだから、別にどうだっていいような気もする。しかし、漠然とした不安感が弥生を押しとどめていた。

ベッドから降り、服を着替える。部屋を見れば、小さい頃から父が本土へ出かける度に買ってきてくれた、人形やぬいぐるみがいっぱいに置いてあった。小学校高学年になってもおみやげはいつも人形かぬいぐるみで、父が部屋に戻ってから、母と二人で苦笑したものだった。そんな部屋の光景も、やはりどこまでも日常のものだった。昨日の晩あったような奇怪な出来事は到底信じられず、これも懸け離れたところに存在する何か自分に縁のないもののように思えた。
小さく息をついて、弥生は自室から出ると、階下へと降りていった。
リヴィングのドアを開ける。父の設計した、窓の多い爽やかな造りの部屋である。テーブルの一番奥の席に、父が座っている。テーブルの上には、トーストの朝食が並んでいる。そして弥生を見た父はにっこりと、優しい笑みを浮かべた。弥生はそれを見ると、いつも心が深く落着く。弥生が幼いころから何一つ変わらない。
見慣れた、朝の光景だった。
安堵した弥生は笑みを返す。

すると父は笑顔のまま、いつもと変わらない様子でこう言った。
「　　、　　?」
弥生は目を落とした。
迷いながら、自分の椅子へと向かう。父はトーストにジャムを塗っている。キッチンから歩いてきた母は、バターをテーブルの上に置き、椅子を引いた。椅子が床をこする音は、うるさいほどによく聞こえた。
母は、弥生に向かって尋ねてきた。
「　　?」
弥生は緊張する。勘に頼って適当に頷くと、母は気にせず椅子に腰掛けた。
今度は父が弥生の顔をのぞき込んで、こう言った。
「　　、　　」
そして、心配そうな顔をして問う。
「　　?　　?」
弥生は、射すくめられたように動けなくなった。
どうしたらいいのかまったく分からない。何を訊かれているのかも分からない。たぶん質問しているのだろうな、ということだけは、父の表情から読み取れた。こういうとき父は何を言うか、弥生は必死で想像する。せめて父の満足できる反応をしなければ、と思う。
いやいっそ、自分の置かれた状況を伝えた方がいいだろうか、とも弥生は考える。けれどすぐに、どうやって伝える、というところで考えが止まってしまう。紙に書けば伝わるだろうか。しかし、仮に何とかして伝えられたとしても、自分も父母もどうすることも出来ないのだ。無意味な悩みをこれ以上父に持って欲しくなかった。結局、八方塞がりだった。
仕方なく、弥生は自分の喉を指さしながら、首を振ったり手でバツ印を作ったりした。
父が驚いた顔をして言う。
「　　?」
弥生はうんうんと頷く。母が首を傾げて父に言った。
「　　、　　。
」

父は母を見やって応えた。
「　　、　　」
そして、弥生に向かって言う。
「　　。　　、　　」
弥生は、にっこりと笑顔を作って頷いた。
バターをトーストの上に伸ばすざりざりという音だけが、いやに耳に残った。
母が、思い出したように言った。
「　　、　　?」
言い終えると、弥生の目をじっと見る。慌てて弥生は、何度か頷いた。
「　　。　　、　　」
母は納得して、コーヒーをすすった。
そして、父と母は話を続けた。
「　　?」
「　　」
「　　、　　」
「　　。　　」
「　　」
「　　、　　、　　、　　」
「　　」
「　　。　　、　　」
「　　」
「　　。　　?」
そこでいきなり、父は困り顔で弥生の目を見た。
弥生は怯えを隠しながら、精一杯の微笑みを浮かべる。頬の辺りが引きつっているのが、自分でもはっきりと分かった。
しかし父は、これ以上訊いても仕方ないな、とでも思ったのか、少し寂しげな顔で、
「　　」
と言ったきり、そのまま諦めた。

父がマグカップに注ぐコーヒーの音ばかりが、やけに大きく聞こえた。
耐えられなくなった弥生は、トーストをミルクで流し込むようにして急いで食べ終えると、椅子から立った。
「　　」
父はそう言いながら、不思議なものを見る目で弥生を見つめた。
「　　」
弥生は、頭を抱えたくなった。
――もう何を言っているのか、さっぱり分からない。
弥生は二階の自室の方を指さしたり、歩き出そうとする動きを全身で見せて、何とか自分の意志を伝えようとした。父と母はそんな弥生を、まるで見たこともない動物を家の中で見つけたような目つきをして、眺めていた。
やがて、母が言う。
「　　、　　。　　？　　、　　」
父も、やっと分かったかのような表情で言った。
「　　、　　。　　」それから、母に向かって言う。「　　、　　。　　」
母がやおら立ち上がった。弥生はびくりとして、その意味を懸命に探る。
母は手近なクロゼットを開けると、中から薬箱を取りだして風邪薬を出し、弥生の前に差し出した。
「　　、　　」
そう、母は言った。
小瓶の中の錠剤の、じゃらじゃらと跳ねる音がやかましかった。
仕方なく、弥生はコップに水を汲んできて、用もないのに風邪薬を二錠飲んだ。
そして、リヴィングを後にした。ドアに向かって歩きながら、弥生は二階を何度も指さしたり、変な笑い顔を示したりした。母はうんうんと頷いていたが、弥生にはどうしても、両親が自分を不審に感じていると思えて

ならず、それが怖くて仕方なかった。自分は何も悪くないと思う。だがそう思えば思うほど、行動が訳の分からないものになっていった。少し、自分の肩が震えているのに気がついた。

リヴィングのドアの閉まる音が、廊下に響いた。

弥生はドアのガラスから自分が見えなくなったと思うやいなや、ほとんど駆け上がるようにして階段を上り、その大袈裟な音に自ら怯えながら、一度も立ち止まらずに自分の部屋へ走り込んで、そして、ドアを閉めた。

人の声が聞こえない、というだけのことが、たとえようもない恐怖だった。

脱力して、閉じたドアにもたれ掛かる。そのまま座り込む。誰も入れるわけにはいかない。誰一人。もう息が上がっている。頭が重くて、本当に熱が出そうだった。ぎゅっ、と強く目を瞑る。頭を抱えてうつむく。部屋に鍵はない。今、もし訝しんだ父や母が部屋に来たら、もう逃げる場所はない。向こうからドアの隙間を通して漏れ出すように、得体の知れない重い不安が迫ってくる。目を開ける。息をつく。

そして弥生は、なんだかひどく空しくなった。

7.

「駄目だ今日は。霧がひどすぎる。こんなひどいのは初めてだ。連絡船も来んだろう」

ひとみの父は、家の窓から海を眺めてこう言った。

窓の外は、薄暗い濃厚な霧で一点の隙もなく満たされていた。

「で、その何とかさんはどうなるんだ」

しかしひとみは、中空を見つめて呆けている。横にいる父が青筋を立てていても、気付かなかった。

――ずっと、昨日のことを考えていた。

あの短い時間では祟嗣に何が起こったのか、ひとみには突き止めることが出来ず、相談しようと神主さんのところへ連れて行ったらそのままになってしまった。それから気を取り直して他の子たちを探してみたが、いつのまにか齋夜も陽も、誰もいなくなっていた。困惑するばかりだった。

ふざけているのだろうと最初は思った。けれど、当たり前のような顔でいつまでも話しかけてくる崇嗣に、徐々に不安をかき立てられた。こんな素直な顔をしたまま人をだませるほど、崇嗣は器用な子ではない。

自分の耳も疑った。しかし境内から聞こえてくる騒ぎ声は、必要以上によく聞こえる。ならば崇嗣の喉がおかしくなったのかとも思ったが、それなら崇嗣自身すぐに気づいて、喋るのをやめるだろう。

それになにより、ひとみの声も崇嗣に届いていないようだった。これが一番分からなかった。彼だって耳の調子が変なら、それ相応の反応を見せるだろう。

何にせよ、ほんの数分接していただけなのだから、考えるにも限度がある。ひとみは昨日のところは諦めて、帰って早々に寝た。けれど、なかなか寝付けなかった。

編集に失敗した映画をちらりと一部分見せられたような、不愉快な気分だけが残った。

「ひとみっ」

だん、とちゃぶ台を叩く大きな音がした。ひとみが驚くと、向かいに座った父が耳を赤くして怒っていた。ただでさえ狭い居間が、ますます狭く感じられた。

「俺の話を聞け」汚くいがらっぽい声で、ひとみの父は喚いた。「その何とかさんはどうなるんだ」

「何とかさん？　ああ、彼のこと？」

「なんだか知らん、そいつだ。こんな天気だからって結局来んとか、そんなんじゃないだろうな」

意味分かんない、と小声で呟いてから、ひとみは応えた。

「彼がこっち来るのは来週。言ったでしょう」

「聞いとらん」不機嫌な返事が間髪入れずに返ってくる。「来週なんて。口ばっかりの」

次第にひとみは頭が痛くなってきた。おそらく父自身も、自分で何を言っているのか分かっていない。とにかく、なんでもいいから文句を言いたいのだろう。反抗期のこどもみたいなものだ。

念のため、ひとみは釘を刺しておく。

「あのさ、お父さん。彼に変なこと言わないでよ」
「変なこととはなんだ。お前のために言っとるんじゃないか」
またその台詞だ。ひとみはうつむく。
「俺が何か言うならそりゃ、そいつに原因があるからだろうが。女みたいな貧相な奴が来たら追い返してやる」
ひとみはなんだか、身体の大きさぴったりの柵が自分の周り四方に張られるような、妙な閉塞感を感じた。
――きっと彼が来たら、色々なことが終わってしまうのだろう。
厭な考えを止め、ひとみは昨日のことにまた思いを巡らせた。とりあえずもう一度崇嗣に会いに行って、事の子細を確かめてくるべきだろう。もしあれが自分の憂鬱な気持ちから来る幻覚だったのなら、それでいい。そうでなければきちんと調べた上で、崇嗣を守ってやるか何かするべきだ。崇嗣はあのまま、今日も祖父の神主さんに叱られているかも知れない。崇嗣の親は今日帰省するという話だが、あの家はもめ事が絶えないという評判である。差し出がましいかも知れないが、自分が仲介役になってやった方が、崇嗣にとってもよいだろう。
本当に差し出がましいな、とひとみは思った。
要するに自分は、自分と関係ないことを一所懸命に考えて、そうしてここから逃げだしたいのだろう。
自分の果てしなく憂鬱な現在から。
「お父さん。ねえお父さん」
母が部屋の隅から、背を向けてしゃがんだまま言った。
「何だうるさいな」
「テレビの調子がおかしくて。映んないの。ちょっと見てくれない」
はぁ、と父は億劫そうに立ち上がった。母がテレビの電源を入れる。
ノイズ音と共に映ったのは、一面の砂嵐だけだった。
「昨日から時々画面が歪んだりして、ちょっと変だったんだけどね。それで今朝になったらこれでしょう。チャンネル変えても全部これなんだから」
「ちょっと見せてみろ」
威厳含みの声で父は母を払いのけ、テレビの前にどっかと陣取った。しばらくの間、電源を入れては消しを繰り返す。リモコンをいじり、プラグ

を抜き差しした後、父はばんばんとテレビを叩き始めた。
「お父さん壊れる」母は言った。
「うるさいな。こういうもんは叩けば大体直るんだ」
かなり激しく叩き続けたが、状態は変わらなかった。しまいに諦めると電源を切り、父は仏頂面のまま、もと座っていた場所へと戻った。
「こら駄目だ。根っこのとこからどっかいかれてる。電器屋に持ってって修理だ」
するとその時、じゃんじゃん、と玄関のガラス戸を叩く音が聞こえた。
「まだ九時だぞ」
父はぼやきながら玄関へ向かった。
居間からちょっと顔を出すとすぐそこが玄関である。ひとみがちらと来客を見やると、何のことはない、町会長だった。彼は父の小中の同窓である。
「お前か」
父もうんざりした声を出す。実際よほどこちらが機嫌のよいときでない限り、町会長の無駄な饒舌は不快だし、他方で父は、常に不機嫌な人間だった。そして町会長は、相手の機嫌を見計らうような器用な真似が出来ない。
いつ見ても町会長の話を聞くときの父は、この上ない凶相を浮かべているし、度を過ぎるといきなり町会長を怒鳴りつけることさえある。昔からそうだった、とこれも彼らの幼なじみである母が、以前小声で話していた。
それなのに二人はよく会話していて、しばしば酒も飲み交わす。話し相手が居なくなると、町会長は懲りずに父のところへお喋りに来る。なんだかんだ言って、父も逃げずにそれ相応の応対をしている。どれだけ厭な顔をしてもどれだけ怒鳴られても、お互い交流を続けているのだから、詰まるところ仲はよいのだろう。変な人間関係だと、いつもひとみは思っている。
「何だ」
無愛想な顔でひとみの父は、やたらにどすの利いた声を出した。それに対して町会長は、普段と変わらず甲高い声で話す。
「まあそう怖い顔するな。いやな、うちや近所でテレビがパーになったも

んだから、お前の家もどうかと思って」
「そんな用なら電話で足りるだろう。こんな濃い霧の中うろうろするな」
珍しく父がまっとうな意見を吐く。しかし町会長は、口をとがらせて反論した。
「それがさな、俺だってそうしたかったさ。それが、電話が死んでるもんだから何ともかんともならなくて。うちの周り一帯みんなそうでな。お前ん家はどうだ？」
はァ、とひとみの父は裏返った声を出すと、廊下に置いてある電話の受話器を取って耳に当てた。そして顔色を曇らせた。
「だろう？　うんともすんともプーとも言わない。どうなってるのかね」
「知らん」父は受話器を力任せに置き、少し考えてこう付け加えた。「あれだ。電波だ。テレビもラジオも電話も、電波だろう。霧が濃いから、電波の調子が悪いんだ。だからだ」
「そんな強引な。電話は電波じゃないだろ。ありゃケーブルだ。それに霧が濃いから調子が悪いって、お前のポンコツ漁船じゃないんだから。無茶を言うなよ」
「だから。知らんと言っただろう。何度も言わすな。ド阿呆」父は吐き捨てた。「俺に学がないのはお前が一番知ってるだろう。原因知っとるなら初めから訊きに来るな」
「そう怒るな。俺だって分からないんだから。いやあ、まいったな。こんな霧じゃ、船も来られんだろうし。どうしようもないな。孤立だ」
「別にいいだろう。どうせ誰も来ないんだから」
父は身も蓋もないことを言う。町会長は、薄くなった頭を掻いた。
「しかし、こんな状態が長いこと続いたらかなわんからな。ひょっとしたら臨時の町内会招集するかもしれんから、そんときはよろしく。じゃあな」
一頻り喋ると満足したのか、町会長は前置きもなく去っていった。霧の中に消える。やはり、何をしに来たのか分からなかった。
ああ、と深くため息をついて、父は居間に戻ってくる。相変わらずどうしようもないいい加減な男だ、と愚痴愚痴と小声で零している。母は、よそも駄目ならしょうがないねえ、などと独りごちている。そうしたつまらないありとあらゆる無為な言葉が、ひとみの耳に入って渦を巻く。澱とな

って沈殿する。
ひとみはふと、こどもたちはどうしているだろう、と考えた。

8.

陽が起きた時には、もう九時を過ぎていた。
家の中は静まりかえっている。
Tシャツジーパンに着替え、ゆっくりと自室のドアを開ける。階下からは何の音も聞こえなかった。仮に昨日のまま声が聞こえないにしても、誰か起き出していれば、何がしかの生活音はあるはずだ。とすれば、家族は皆まだ寝ているのだろう。足音を立てないよう、陽は階段を下りた。
毎年祭りの翌日は、遅くまで寝ているのが陽の家の習慣だった。元々は、こども達を連れて遅くまで祭りに出ては、島民と酒を飲んで騒いでいた陽の祖父、つまり大先生に合わせていたのである。そして、祭りに行かないのに飲む父敬一郎、はしゃいで遅くまで興奮しているものだから寝付かれない兄春文が、やはり起きられない。それらに便乗して、母は遅くまで寝ている。だから神凪島診療所は、祭りの翌日、昼過ぎまでは休診状態になる。
階下はまだ酒臭かった。食卓の上には、コップと皿が置いたままになっている。つまみの味海苔が、ビールに濡れてべったりと机に張り付いていた。陽はそれらを脇にどけてから、キッチンへ行ってなるべく音を立てないようにパンを焼き、コーヒーを入れた。
食べ終えるとさっさと片付け、ソファに寝そべり、陽は頭を空っぽにした。目を瞑り、ゆっくりと息をつく。腹の底から全ての空気を追い出すように、ゆっくりと、ゆっくりと吐いた。

陽は、うんざりしていた。

ちらりと階段を見やって、誰も起きてこないことを確かめる。そして陽は玄関へ向かうと、静かに家を出た。
理由も目的も、特になかった。

出てみると、外は一面の霧だった。
陽は深呼吸してみる。霧からは、どことなく甘い香りを感じた。ほんの数メートル先がもう見えない。かき回してみると、掌がしっとりとしてくる。そして空は曇っている。
そのまま、行くあてもなく歩いた。
祭りの翌日は、陽の家に限らずどこも大体寝坊するようで、実質島では休日のようなものだった。それでも九時ともなれば起きている家も多いはずで、実際陽の耳には、食器を洗う音や足音は聞こえてくる。だが、人の声はまったくなかった。
――するとあれは、夢ではなかったのか。
歩いていると、前方の霧から湧き上がるようにして、次々と家並みが立ち現れた。自分の行く道も、そうして順次見えてくる。陽はランニングマシンに乗せられているような、あるいは、巻物状の背景が後ろへ送られていく安手の芝居に出ているような、そんな馬鹿馬鹿しい気分になった。
何も考えず、ひたすら歩く。
このまま歩いていけば、いずれ誰かと出会うだろうか。齋夜や健太や弥生だといいが、たぶん違う。どこかのおじさんか、おばさんかが霧の中からやって来る。そしてそういう人たちは、大抵退屈している。いつ見ても気が抜けていて、締まりがない。祭も終わって、話のネタに飢えている。
そんな人と自分が鉢合わせしたら、暇つぶしの材料にされるに決まっている。その上陽には、向こうが何を言っているのか何一つ分からないのだ。加えてこちらが何を言っているかも、全然分かってもらえない。不毛だ。
――すごく、面倒くさい。
陽はせいぜい、真面目な顔をして歩くことにした。高校では陽がしかつめらしい顔をしていると、誰も話しかけてこない。進学校内でも成績はいい方だったから、一目置かれて、或いは一歩引かれているのだろうと思う。陽はそれでも構わなかった。むしろ、その方が楽だ。勝手に向こうが陽のことを、深謀遠慮に富んだ誠実な人間だと勘違いしてくる。同学年の奴らがなぜか敬語で話しかけたりもしてきて、それも陽は可笑しかった。実のところ陽は、何も考えていないだけなのだ。
そんな調子だから、陽には友達はおろか、話し相手すら高校ではいなか

った。文句はない。だから今でも、幼なじみのあの四人だけが、あらゆる意味で特別だった。

気付くと陽は、港近くまで来ていた。

海を見る。普段天気のいい日なら、対岸の本土まで見えるような場所なのに、今日は延々と続く霧で、途中から何も見えなくなっていた。灰色の雲と霧が融け混じり合い、その下に暗い波が揺れていて、その海も、ある地点から先は作られていないかのように消え失せていた。

陽はそれを、無心に眺めていた。

不意に、背後に近づく足音が聞こえた。陽は咄嗟に振り返った。

そこには、ひとみが立っていた。

彼女は珍しく無表情だったが、目が少し大きく見開かれていて、驚いているように見えた。しかし、不安の表情とも畏怖の表情ともとれた。言葉がなければ、何も分からない。

しばらく、陽は待っていた。ひとみも待っているようだった。

やがて躊躇うようにして、ひとみはこう言った。

「　　」

陽は、期待が裏切られたような気持ちになった。

陽は何も言わず駆けだした。手を伸ばして止めようとするひとみに構わず、陽は港から走り去る。ひとみの姿は、たちまち背後の靄の中へと吸い込まれていった。

――さて。

――どこへ行こうか。

9.

「崇嗣。いい加減起きなさい。崇嗣」

そう言って、信蔵は崇嗣の部屋のドアを叩く。返事はない。信蔵はため息をついた。もう今は昼前だ。

朝起きるなり屋外の様子に仰天した信蔵は、とりあえず祭の片付けの中止連絡を、町内会の連絡網で回そうとした。しかし、電話は動かない。天気予報を調べようにも、テレビもラジオも壊れたようにノイズを流し続けるばかりだ。どうにも仕様がないから、自分一人で神社へ中止の張り紙を貼りに行った。

何とか無事に帰宅したが、つまずかないよう気を張り詰めて歩いたので、体力的にというよりむしろ精神的に疲れた。そして彼は憤った。こんな事は、本来七十過ぎの自分がやる仕事ではない。その怒りは息子へ、そして孫へと向かう。そもそも息子が自分の後を継ぎさえすれば、こんな老躯に鞭打つ無理な社務をせずとも済んだのだ。その息子が甘やかした孫も、マンガを読んでゲームをするばかりで、手伝いの一つもしない。

信蔵は、ドアをいきなり開けた。

畳の床に敷かれた布団が、びくりと震えた。信蔵は部屋の中へ踏み込み、そして布団を無理に引きはがした。

その中では、枕を抱きかかえた崇嗣が、変な顔をして丸くなっていた。

「起きとるじゃないか」

崇嗣は、昨日着せた衣装のままだった。信蔵は少し笑う。

「なんだその格好は。着替えずに寝たんか。皺になるから、早く脱ぎなさい」

しかし崇嗣は、当惑した表情のまま動こうとしなかった。

信蔵はここに至って、少し悪いことをしたような気になった。昨日神社から連れ帰った後、一時間近くにわたって崇嗣に説教をしたのである。

――崇嗣。お前は小さい頃から何度儂が叱ってやっても、何一つ聞きいれんな。面倒くさがって、楽な方楽な方へ流れていく。そんなことではいかん。な。お前ももう十七だ。将来のことも考えないといかん。若いうちはちゃんと色々苦労して、それで、何もかもそれからだ。儂だって昔は。おい、崇嗣。聞いとるか。

昔は。

昔は自分はどうだったか。信蔵は説教しながら、考えた。

思い出せなかった。

一方で説教の間も、崇嗣は信蔵のことを、何か異常なものを見る目で見

つめているばかりだった。そのことが、よけいに信蔵を怒らせた。言いたいことがあるなら話しなさい、と促しても、口を小さくもぞもぞと動かして、

「　　」

と言うばかりだった。信蔵は更に苛立ち、どやしつけた。

しかし一晩明けて考えてみると、あの時はどうも様子がおかしかったように思われた。こざかしいことばかり言っても、まだこどもである。向こうの父親の家で、何かあったのかも知れない。そう考えた信蔵は、今日は少し優しく出てみることにした。

「崇嗣。何か、向こうで厭なことでもあったか？　じいちゃんに、話してみなさい。父さんがなんかしたか」

自分でも不気味に感じられる、やたらに柔い声だった。

崇嗣は弛緩した顔つきで、口を半開きにしたまま黙っている。

「もう少し締まりのある顔は出来んのか。ぴしっと。崇嗣」

だが、崇嗣の表情は変わらない。そのうちに信蔵に向かって、何か厭なものでも見るような怯えた目つきをし出した。信蔵は寝ぼけているのだと決めつけ、背を向けた。

「顔を洗いなさい」

崇嗣からの返事はなかった。腹を立てたまま、信蔵は部屋を後にした。

信蔵が居間に戻ってくると、妻が崇嗣はどうかしたのかと尋ねてくる。信蔵は応えた。

「知らん。分からん。放っておきなさい」

するとその時、玄関のチャイムの音が聞こえた。妻は昼食の用意に忙しい。信蔵はため息を漏らしながら、はいはい開いていますよ、と玄関を開けた。

そこには、若い女を連れた背の高い、にやついた男が立っていた。

「慶彰（よしあき）」信蔵は呟いた。「お前、来たんか」

「だから来るって言っただろ。崇嗣から聞いてなかったか」横柄な口ぶりで慶彰は言った。「何か親父、また縮んだな」

「要らんことを言うな」信蔵は顔をしかめる。「まあ、入りなさい。そちら、が」

女の方を見て、信蔵は目を細めた。女は軽く頭を下げる。小柄で髪の長い、少しだけつり目の女だった。
「初めまして、佐久間幸奈（さくまゆきな）と申します。ご挨拶が遅れまして」
「いやいや。まあ、中へ」
二人の背後には、やはり濃い霧の波がうねっていた。
一応改まって、畳敷きの客間へ通す。ようやくやって来た妻が、甲高い声を上げた。
「まあまあ。やっと来た」
「何だそんな格好で、みっともない。ちゃんと着替えてからきなさい」
信蔵はそう言ってたしなめる。
「はいはい。いやあ、よう来たね」
どちらでもいいようなことを口走りながら、妻は台所へと戻っていった。
息をついて、信蔵は話し始める。
「まあ。うん。どうやって来た。船無かっただろう」
「ああ。実は昨日から、もうこっちに来てたんだけどね」
慶彰はあっさりと言った。
「はあ？」
「いや、昨日の夕方に向こうの港近くに着いて、どうも天気悪かったからいつものあの船長に訊いたら、明日は海も荒れそうだし、変な霧も出てきたから船が出ないかも知れない、とか言って。俺、もうぎりぎりしか休み取れないから、日ずらす訳にいかないし、それでちょっと」
言いながら慶彰は、にぎにぎと妙な手つきをした。
「ちょっと何だ。船はないだろう、夕方では」
「ちょっと包んだら簡単に船、出してくれた」飄々と慶彰は言う。「で、昨日の晩は篝（かがり）のところに泊めてもらった」
信蔵は顔をしかめた。
「あまりそういう非常識なことをするな。すぐ噂になるから」
しかし慶彰は笑うばかりだった。そして、辺りを見回して言う。
「崇嗣は？」
「ついさっき起きたばかりだ」苦々しい顔つきになって信蔵は問う。「向こうじゃ一体どんな生活しとるんだ」

「普通だって」慶彰はひらひらと手を振って否定する。「夏休みなんだから。学校はちゃんと行ってるよ。なあ」
そう言って幸奈へ話を振る。幸奈は控えめにええ、と頷いたきりだった。
妻が盆に茶を載せて入ってくる。幸奈が、あ、と言って少し腰を浮かせた。
「あの、お義母様、私、その、お手伝い」
「いいよいいよ。大丈夫大丈夫。ありがとうね。うん」
そんな間延びしたやりとりを、男二人はぼうと眺めている。
結局幸奈が諦めて、また腰を下ろした。彼女はずっと張り詰めたように、背筋を真っ直ぐに伸ばしていた。
すると不意に、廊下から素足の足音が聞こえた。信蔵が顔を向けると、力なくべたべたと崇嗣が歩いてくるところだった。半袖シャツと抹茶色の短パンに着替えていた。
「崇嗣」
信蔵が声をかけると、少し間を開けてから崇嗣が振り向いた。すると慶彰が片手を挙げて、よっ、と軽い挨拶をする。崇嗣は驚いた後、微妙に顔を歪めた。
「なんだよ、親父が来たのに厭がるなよ」
にやにや笑いながら慶彰は言う。崇嗣は片眉を下げ、そのまま立ち去ろうとした。
「おい」
慶彰が呼び止めても何の反応もなく、崇嗣はふすまの向こうへと消えた。
信蔵は問う。
「お前普段から何かろくでもないことしてるんじゃないのか。何か、崇嗣が厭がるような」
「してないしてない。楽しく過ごせるようにしてるって」
「楽しく過ごせればいいってもんじゃないだろう」
むっとして信蔵が言う。
「じゃあどうすりゃいいんだよ」
鼻で笑って慶彰はあしらった。
すると、崇嗣が向かった廊下の方から、カチャカチャとしきりに何か音

が聞こえだした。あまりにいつまでも続くので、何をしているのかと思って信蔵は見に行った。
廊下の突き当たりに、崇嗣の背中が見えた。どうやら、電話をいじっているようだった。信蔵は少し大きな声で伝えた。
「崇嗣、それ駄目だ。壊れてる」
崇嗣は振り返りもせず、黙々とボタンを押している。
同じボタンを連打する音が、静かな廊下に響いた。
「崇嗣。おい。崇嗣」
崇嗣は何度も何度も、受話器を取っては置く、を繰り返している。
そして、耳に必死で受話器を押しつける。
「崇嗣」
ついには崇嗣は電話の本体を、ばんばんと平手で叩き出した。
急いで駆け寄り、信蔵は崇嗣の肩を掴む。途端に崇嗣は飛び上がるほど驚いて、電話台を倒しそうになった。そして、瞬きを繰り返して信蔵を見た。
「どうした、大丈夫か」いささか動揺して、信蔵は尋ねる。「耳の調子でも悪いのか？　ん？」
しかし崇嗣は不安げな顔をして、逃げ道を探るように信蔵の脇をきょろきょろと見やっている。
ようやく客間からやって来た慶彰が、気軽に話しかけてきた。
「どうかした？」
「崇嗣、聞こえるか、崇嗣」
かなり耳元で信蔵は大きな声を出したが、崇嗣は顔を背けようともせず、何故か眉をひそめた。何か言いたそうにしているが、何も言わない。やがて、受話器を再び手に取ろうとした。
信蔵が手を掴んでやめさせようとすると、崇嗣は異様に怯えた顔をして、無理矢理にでも電話にしがみつこうとし、暴れる。静かにあがく崇嗣は、信蔵が焦るほどの力を出した。
「おいおいおい何だ何だ」
やっと事態がおかしいことに気づいた慶彰が寄ってきて、一緒に崇嗣を取り押さえようとする。崇嗣は力の限り受話器を掴んだまま、離さない。

一方で、何だよ、とも、離せよ、とも言わなかった。当の崇嗣が静かなので、取り押さえようとする二人も黙ったままで、その所為か、客間にいる幸奈や信蔵の妻は、この騒ぎにまったく気付いていないようだった。

無言の格闘が続いた。

次第に怒りだした慶彰が、受話器を崇嗣の手から引きはがして、何とか客間の方へ連れて行った。一度電話から離すと崇嗣はおとなしくなったが、ちらちらと諦めきれない様子で、電話台を横目に見ていた。

「あれ。どうしたんお父さん」客間に戻るなり、信蔵の妻が目を丸く見開いて言った。

「崇嗣が急に暴れ出して」慶彰が代わって不機嫌に答えた。「ほら、座れ。ほら」

そうして慶彰は崇嗣を無理矢理に畳の上へ座らせた。信蔵も元の場所に座る。信蔵も含めて四人のおとなが、じっと崇嗣の顔を見つめた。

崇嗣は、照れているようにも怒っているようにも、悲しんでいるようにもふざけているようにも見える表情を浮かべていた。

「どこにそんなに電話したかったんだ」慶彰が低い声で尋ねた。

崇嗣は何も言わない。

「どうかしたのか。気分悪いのか？」

崇嗣は何も言わない。

「黙ってちゃ分からないだろうが。何か言えよ」

崇嗣は何も言わない。

「おいこら。調子乗るのもいい加減にしろ」

崇嗣は何も言わない。

「お前な」おもむろに立ち上がると、慶彰は崇嗣に詰め寄る。

「ちょっとちょっと、やめなさい。崇嗣が怖がるでしょう」

信蔵の妻が横から口を挟むが、慶彰は聞き入れなかった。

「たかしッ」

慶彰は怒鳴った。

崇嗣は、小さな声で言った。

「　　」

信蔵は、崇嗣のことが急に、分からなくなった。

10.

健太は朝起きると服を着て、布団をたたみ、頭を掻きながら部屋を出た。八時過ぎだった。珍しく蝉の鳴き声は聞こえない。家族はもう仕事を始めているようで、家中静かだった。

洗面所で顔を洗い、ついでにちょっと水を飲む。神凪島の水はとても綺麗で、酒造りに適している。冷たい水が喉から身体へ流れ込んでいく感覚は、爽快な風景を眺めた時の清涼感に似ていた。

しかし、健太はまだ寝ぼけている。

酒造りは冬場にほとんどの手順が終わってしまうため、今の時節、それほどの仕事はない。それでも健太の父親は生真面目な性格なので、毎朝七時前には必ず起きて、仕事の支度を始める。母もそれに付いて手伝う。だから健太が食卓に着いたときには、既に誰もいなかった。

ちゃぶ台の上には、ラップのかけられた朝食が置いてある。その脇に、何かが書いてあるメモ用紙があった。健太はちらりとそれに目をやる。母親が手早く書いた文字だった。

――何と書いてあるか、読めなかった。

健太は払いのけた。

食事を終えると、食器をまとめて台所へ持っていった。そしてその帰り、便所へ向かった。

すると途中で向こうから、杜氏の畑がやって来るのが見えた。

一見したところ、だるまのような男である。彼はもう五十代で、先代の頃からずっと隣に住んで、眞田酒造で働いていた。ぼうとした健太とのすれ違いざま、人なつこい笑顔で畑は言った。

「　、　　、　　」

そこで、健太は目を覚ました。

振り返って畑を見るが、彼は廊下を歩いていくばかりだった。歩く姿もだるまのように揺れていた。健太は、激しく動揺した。昨日のことを今の

今まで、すっかり忘れていた。
――何故。どうしてまだ、なおってないんだ。
廊下の中途で、健太は混乱した。
今のは間違いかも知れない。健太は頭を抱えた。泣きたくなってくる。昨日の祭の光景だって、何かの間違いだ。そうだ。そうに違いない。あんなことがあるはずないんだから。だったら、そう、きっとこの帰省自体も間違いだったんだ。どこからか自分は何かを間違ってしまって、その結果こんな変なことに巻き込まれているんだ。きっとそうだ。じゃあ、一体どこから間違ってしまったんだろう。
――去年の夏だ。
グラウンドで右肩に感じた強い違和感を、健太は思い出す。
あれ以来、何もかもがおかしくなってしまったのだ。
そこでようやく、廊下の窓の外の様子がおかしいことに健太は気付いた。空気は夏の暑さをたたえているのに、外はまるで雪でも積もったかのように純白に映っている。多分霧だ、と健太は思った。そしてただひたすら、外は不気味に静かなままだった。
健太は困惑した。おとなたちはしかし、さっきの畑の様子からしても、このあからさまな異常時に誰も何も気づいていないようだった。何故だ、と健太は懸命に考える。何も分からない。
原因は何だ。自分たちこどもの側か、それともおとなたちか、それとも何かもっとすごい、何者かだろうか。考えても考えても、何も分からなかった。分からないけれど、しかしそれでも健太は考え続けた。陽は昨日、原因など考えたところで何にもならないと言っていた。それはその通り、原因などどうでもいいから、むしろ今どうすべきかを考えるべきだろう。そんなことは自分だって分かっている。
けれどそれは、自分のような弱い人間には所詮難しいことなのだ。自分の立脚している土台が崩れ始めているのに、どうやったらそのまま立ち続けられるか考えろ、などと言われても、出来るわけがない。パニックになって泣き喚き叫びながら、土台に文句をぶつけ続けることしか出来ないものだ。
それに、何も手を打たずに原因を考えている方が気が楽だった。

逃げ出すか、とも思う。しかしどこへ。島中どこへ行っても、頼れる相手はおとなしかいないのだ。周囲全面敵に取り囲まれたようなものだった。頼った先でも同じように話が通じないのなら、逃げたところで意味はなかった。廊下の中途に立ち尽くして、健太は頻りに指の爪を噛んだ。

なんとか島の外へ、とも考える。しかし、本土に渡ったところで相変わらずおとなの声が聞こえなかったら最悪だ。今以上に頼る相手はなく、逃げ場もない。規模が大きくなるだけである。そんなことを考え続けた揚句、臆病な健太はどうしようもない恐怖に駆られ、そして仕舞いに、妙な妄想に囚われた。

――もしかしたら今はもう、島の外なんかないんじゃないか。

――島を包み海を覆う霧の向こうには、どこまで漕ぎ出でても、何もないんじゃないか。

――逃げ道は、もうどこにもないんじゃないか。

廊下を走って、健太は自室へ戻った。ふすまを力任せに閉めると、畳にあぐらを掻いて座り込み、固く目を瞑った。

――こわい。

ずっとこのまま独りで部屋の中にいたいと健太は思った。そうすれば安心だ。全てが、安定する。

ずっと、いつまでも、この部屋の中にだけいればいい。

――外は怖い。

――よく分からないけれど、とにかく怖い。怖いんだ。

するとその時。

外から、足音がした。

健太は怯えて、部屋のふすまを見つめた。普段なら声や物音で聞こえてこない、廊下のぎいぎいと軋む音が、今ははっきりと耳に届く。自分を侵食するような擦れた音が、少しずつ確実に、健太の部屋へと迫ってくる。

一体誰だ、と健太は必死で考えを巡らせる。よりによってこんな時に、今までずっと、誰も来ていなかったのに、何で。そして、誰であろうと頼む、来ないでくれ、と健太は願った。

誰にも会いたくない。まだ、行きたくない。

――厭だ。

しかし、少しずつ近寄ってくる。
もう健太に、逃げ場はない。
足音は部屋の前で止まり、そしてふすまが、遠慮がちにとん、とん、と鳴った。返事を待つ間を開け、何度も、繰り返し鳴った。
健太は、何も言わない。
やがて、ふすまは開いた。

†

やって来たのは畑だった。茫然とする健太をよそに、親しみのこもった笑顔で畑は言った。
「　　。　　、　　」
そして、手招きする。健太は下手に不審な行動をとるとよけいに面倒なことになると思い、内心の怯えを隠しながら、畑の後について部屋を出た。
畑はどこへ向かってか、廊下をすたすたと歩いていく。黙ったままの健太にも、彼は不審を抱いていない様子だった。健太は家では以前からあまり喋らなかったし、それに去年の夏以来沈みがちだったから、無理もない。
やがて二人は、酒蔵まで着いた。ここへ来てようやく、健太は思い出した。
帰省する前に父親と電話で話したとき、畑に蔵を案内してもらうよう、健太は言われていたのだった。その時は生返事で適当に聞き流していたが、どうやら父親が、予め畑に頼んでおいてくれたようだった。
酒造りは十二月頃から始まり、春になる前に終わる。それに眞田酒造は祭りの神酒を造るのが先祖代々の主な仕事だから、そもそも大した量を作るわけでもない。その残った分を詰めて、自分の店で細々売っている程度だ。それでも、蔵の中に入るとほんのりと酒の香りがした。二人の足音は、他に何の音もない広く静かな蔵の中で、必要以上に響いた。
静かだった。
樽や櫂を指しながら、畑は嬉しそうに説明している、ようだった。健太には、声はまったく聞こえない。ただ、表情や身振りを見る限り、ずいぶん熱心そうだった。

なんだかんだと昔から憎まれ口を叩きながらも、畑は健太のことが好きなのだ。彼には妻も子供もいないから、その気持ちは強かったに違いない。だからきっと、去年の夏あんなことがあって、畑は内心喜んだのだと思う。

小さい頃から父親や畑が働いているそばで、ずっと作業を見てきたから、健太もおおよそ工程は掴んでいる。だが、個々の道具の使い道や正確な酒造りの方法までは、まだ知らない。これからそういったことを、健太は事細かに学んでいくことになるのだろう。

――なるけれども。

健太は思う。

静かな蔵の空気に影響されてか、いつの間にか健太の混乱は収まっていた。嬉々として説明を続ける畑を見ながら、不思議なほど落着いた気持ちで、健太は考える。

――もう自分にも、その時が来てしまうのだろうか。

思いがけず手にした優しい静けさの中、健太は、いつもじきに横やりを入れられて満足に考えられないような種々のことを、独りゆっくりと考えていた。

そして、やはり思った。

――まだ、来ないでくれ。

11.

「はいはい分かった分かった」

「何だその言い方は」

信蔵は慶彰に向かって険悪な声を出した。いつもの親子喧嘩だ。この二人の喧嘩は怒鳴り合いにはならず、妙に静かなまま続く。そしてそれがよけいに、雰囲気を悪くする。

「お父さん、もうそのくらいにして」

か細い声で、信蔵の妻がたしなめた。

「儂のせいか。元はと言えば慶彰が悪いんだろう」

信蔵は即座に妻に言う。そして思い返す。そもそも何が、この諍いの原

因だったろうか。
——思い出せない。
「いやだから、崇嗣は俺の子だから。親父の言うことは分かるけども」
けども、をいやに強調して慶彰は言う。その教え諭すような口調が、信蔵をまたしても苛立たせる。
「俺が言いたいのは、問題はそこにあるんじゃなくて」
「じゃあなんだ」
「親父の言い方が、まるで俺に崇嗣のこの、何だ、喋らなくなってるのの原因があるみたく聞こえるから、そこがおかしいって言ってるの」
「そんなことは言ってない」
「いや言ってるって」
「儂はちゃんと育ててるのかと訊いただけだ」
「親父がどう言ったかはこの際どうでもよくて」
「どうでもいいことはないだろう」
堂々巡りだ、ということは信蔵も分かっているし、慶彰も自覚しているだろう。親子どちらも半端に理屈っぽいものだから、ますます始末が悪い。そして若い慶彰の方がよく口と頭が回るだけに、やや分がある。
信蔵も正直言って、こんな話はもうどうでもよかった。時間の無駄だ。馬鹿らしい。崇嗣を何とかする方が先決だと思う。だが、言うことなすこと皆に慶彰が口を挟むのである。口を挟むのは父親なのだから当然だと信蔵も思うが、どうにも口ぶりが不愉快なのだ。信蔵の判断に、ことごとく逆らってくる。
診療所へ連れて行こう、と言えば、そんなことは意味がない、と言い、じゃあ崇嗣に直にどうしたのか尋ねて、それから落着いて三人話し合おう、と言えば、聞いたところでどうしようもないじゃないか、そもそもさっきから口をぱくぱくしているばかりで何も言わない、と不平を言う。じゃあどうするんだ、と問うと、ただ放っておけばいい、などと無責任なことを言い出す。
父親なんだから自分の子供に責任を持て、と言ったが最後、際限ない口喧嘩が始まった。そうして今に至る。
「まず親父に、そんな教育論みたいなもん言われる筋合ないから」

慶彰は言う。その口ぶりが、とにかく信蔵は腹が立った。馬鹿を説得するような、人をなめたしゃべり方をするのだ。何故こんな人間になってしまったのだろう。そう考えると、今度は自分に責任が廻ってきそうなので、信蔵は慌てて考えを打ち消した。

崇嗣は二人の座る机の向かいで、うつむいたまま黙っていた。その傍らに信蔵の妻と幸奈が、やはり静かに座っている。

「こいつはどうせ、何かで癇癪起こして気まぐれで黙ってるの。ストライキみたいなもんだろ」

分かったような口調で慶彰は言った。

「よくやるんだって。気に入らないから勝手やるの。聞こえてないふりしてるだけ。そのうちまた喋るから、大丈夫」

「だったらちゃんと話を聞いてやればいいだろう。どこか本当に調子が悪いのかも知れんのだから、それなら診療所へ」

「無駄だって」

また同じところに戻る。

信蔵も分かっている。この言い争いも詰まるところ、慶彰が家を出て行って以来続いている対立の延長に過ぎないのだ。崇嗣のことはきっかけになっているだけで、二人とも元より結論を出そうという気がない。結論が出そうになっても、どちらかが混ぜ返して結局は元に戻る。だから、いつまで経っても終わらない。

慶彰が鼻で笑いながら、こう言った。

「大体親父、崇嗣の話聞いて分かるの？　俺でも分かんないのに」

「おいお前、こどもの前でそんなこと言うな」

「だから、聞こえてないんでしょ？」

慶彰はちらと崇嗣を見やる。崇嗣はうつむいたまま、何の反応も示さない。

「大したもんだ。あのね、俺でも崇嗣が何を望んでるのか、何がご不満なのか分かんないの。ジェネレーションギャップってやつか。それでまあ色々、面倒ごととかあるけど、それでも俺なりに一生懸命やってるんだよ。そんなのを親父が聞いたって、これ分かるわけないじゃないか。違うか？」

信蔵は言葉に詰まる。それは事実だった。崇嗣を預けられてこの方、こ

の子を自分が育てられたのと同じように育てても、どうもぴんとこなかった。慶彰を育てたときでさえ、うまくいかなかった挙げ句に今のような結果になったのだから、それは当然なのかも知れない。いや、実を言えば自分がどうやって育てられたか、信蔵にはもう思い出せないのだ。

――自分はどんな、こどもだったろうか。

思い出せない。

「分からんからって聞かんでいいことにはならんだろう」信蔵は言い訳がましさを押し隠して言った。

「へえ、分からないことは認めるか」

「どうしてお前はそういちいち、腹の立つ言い方ばかりするんだ」

「俺はちゃんと普通に話してる」

またずるずると、下らない内容へともつれ込んでいく。

その間、崇嗣はひたすら黙りこくっていた。気味が悪いほどだった。いや、思えばそれは、今始まったことではなかった。信蔵はようやく気付いたのだ。自分たちがこうして口喧嘩をする間、崇嗣は一度だって、何かを言ったことはなかった。どこかへ遊びに行ってしまうか、部屋に閉じこもるか。とにかく、口を挟んだことはなかった。

こどもなのだからそれが当然だろうと信蔵は無意識のうちに決めつけて何も思わなかったが、今、徐々にそれが奇妙なことのではないか、という気がしてきた。殊にこうして、同じ場所にいるというのに何も言わない。考えてみれば異様だった。今頃になって、その異様な崇嗣が何を考えているのかさっぱり分からない自分を、信蔵は強烈に意識した。そしてそれは、慶彰も同じだろう。

気付くのが遅すぎたのかも知れない。

その時、突然妻の叫び声が聞こえた。

信蔵がそちらを向くと同時に、信蔵の顔の横を、湯飲み茶碗が熱い茶を撒き散らしながら横切っていった。

どん、と重い音を立てて、湯飲みは畳の上に転がった。目に沿ってじわりと茶が広がる。信蔵は、湯飲みが飛んできた方を見た。

憎悪の塊のような顔をして、崇嗣がこちらを睨んでいた。

「たかしっ」

慶彰が叫んで、崇嗣に駆け寄る。信蔵は硬直したまま動けない。幸奈も信蔵の妻も、おののき青ざめている。崇嗣は大声を上げるように口を動かして別の湯飲みを掴むと、近づいてくる慶彰に力一杯投げつけた。今度も当たらず、それはそのまま飛んでいって、壁にぶつかると派手な音を立てて砕けた。

「ばかやろうお前」

襖を蹴り倒し盆を投げ、崇嗣は暴れながら慶彰から逃げまどう。信蔵の妻は隅で小さくなって、ああ、とかおう、とか言い、幸奈は机にしがみついて震えていた。

そんな光景を見ながら、信蔵はまだ動けない。

崇嗣はその隙に、客間から駆けだしていった。その後ろをおい、こらと怒鳴りながら、慶彰が追い掛けていく。

そうして部屋は、静かになった。

遠くの方から、物がひっくり返る音や壊れる音、ガラスの割れる音が、他人事のように薄く聞こえてきた。慶彰のわめき声も、その合間にときおり挟まる。ああ花瓶が落ちたな、食器棚が倒れたな、と信蔵は思った。台所の方から何かが破砕する音、居間からも何か重い家具が転倒する地響きが伝わってきた。

それでも崇嗣の声は、何も聞こえてこなかった。

やがてやかましい音は鳴りやみ、今度はよく分からない、鈍い音が聞こえだした。人が倒れるようなばたんという音がした。慶彰の痛え、ちくしょう、という声が何度かあった。このくそ餓鬼、と言っている。おや、殴り合いだろうか、と信蔵はぼんやりと思った。これはいけない、止めないといけないな、と思った。

そして、信蔵は何も出来なかった。

やがて音は一方的になる。少し離れたどこかの部屋で、慶彰は崇嗣を殴っている。

どんなに殴られても、崇嗣の泣き声は伝わってこなかった。

きっと、だから慶彰も殴り続けているのだろう、と信蔵は分かった。

妻が、お父さん止めてきてくださいよ崇嗣が、と言って、泣いているような気がする。しかし、どこの部屋に二人はいるのだろう。ちょっと分か

らないな。それに、なんだか気持ちがひどく億劫だった。身体に力が入らない。信蔵は半ば脱力して、座布団の上に座りほうけていた。視界の隅では、だだっ広く茶が畳の上に流れ出ていた。

――ああ。

不意に、脳天気な玄関チャイムの音が響いた。

「すいませーん、珠川です。神主さん、ちょっとよろしいですか」

急に、意識の焦点が合った。

気づけば、部屋は滅茶苦茶に乱れていた。ふすまに穴が空き、湯飲みの欠片が散っている。どこかの部屋にいる慶彰と崇嗣はいつの間にか静かになっていたが、たぶん家中荒れ放題だろう。いけないな、と信蔵は思った。

腰を抜かしたまま動かない妻と幸奈を放っておいて、信蔵は小走りでいそいそと玄関へと向かった。何とか玄関で帰ってもらわないといけない。しかし、何の用事だろうか。破れた障子や飛び散ったガラスを横目で見ながら、信蔵は考えた。

玄関戸を開ける。

「こんにちはー」

相変わらずの愛らしい笑顔で、来客の珠川ひとみは頭を下げた。そうして笑う。

「なんだか変な感じがしますねー、神主さんが普段着着てると」

「え？」

出し抜けに思わぬことを言われて、信蔵はかなり困惑した。そして、こんな牧歌的な言葉がずいぶん久しぶりに感じられた。

ひとみは、普段どおりの愛嬌のある口ぶりで続けた。

「あの、今よろしいですか」

「ああ、まあ。何の用かな」

「昨日崇嗣君の様子がなんだか変で、それで私神主さんにお伝えしようと思ったんですけど、ちゃんと言えなくて」

「昨日？」

「ほら、私が崇嗣君が隠れてるの見つけてきて、それで神主さんに引き渡

した、あの時。その、何というか、あの子様子が」
「昨日？」
信蔵は再び言った。これは、独り言だった。
――昨日既に、崇嗣はああなっていたのか？
信蔵はもう、厭になってきた。
「それで、差し出がましいとは思ったんですが、今日はどんな具合かなー、と思いまして」
ひとみは照れ笑いを浮かべて、そう言い終えた。信蔵の返事を待つ。
しかし信蔵は、何も言うことはなかった。
黙っていた。
疲れたのだ。
いつまでも何も言おうとせず立ち尽くしたままの信蔵を、次第にひとみは、怪訝に見つめだした。
するとその時、唐突に家の奥から、裸足で廊下を走ってくる音が聞こえた。近づいてきて、ついには玄関までやって来る。何か、その後を追う音もした。
走ってきたのは、崇嗣だった。玄関前まで来たところで彼はよろめき躓いて、勢いよく顔から倒れ込んだ。
「え、ちょっと、大丈夫崇嗣君」
心配そうに問うひとみの言にもやはり気付かない崇嗣は、顔を上げた。
顔はあちこちが赤く腫れ上がり、唇は切れ、鼻血が垂れ、涙とよだれが滴っていた。腕や足には、たくさんの切り傷と痣が出来ていた。
そして、絶望した顔で震えながら、崇嗣はこう言った。
「　　、　　」
何も言わないひとみを、信蔵は真っ白な頭で見ていた。遅れて現れた慶彰は、やはり怪我だらけになっていたが、状況を察して口を閉ざした。
静かだった。
玄関の外は、霧に包まれている。

12.

午後三時、弥生は自室を出た。とんとんと軽い足どりで階段を下る。普段なら階下に降りると父母の話し声が聞こえるが、今日は何一つ聞こえてこない。

弥生はリヴィングの扉を開けた。父は、建築関係の雑誌をソファに座って読んでいる。母は、ダイニングテーブルで紅茶を入れていた。父は弥生をちらりと見ただけで、すぐに目を雑誌に戻す。何も気にしていないようだった。これで後は、母にだけ注意しておけばよい。

弥生は、母の目の前の椅子に座る。母が、弥生に向かってこう言った。

「　　？」

弥生ははっきりと頷いた。おそらく「喉大丈夫？」か、「弥生も飲む？」かのどちらかだろう。どちらにせよ、肯っておけば構わない。

案の定、母はキッチンの食器棚へ向かった。弥生のカップを取ってくると、そこに紅茶を注いでくれる。テーブルの上には、缶に入ったクッキーが置いてある。弥生はそれを、一つつまんで食べた。

母が父に声をかけた。

「　　？」

父はテーブルの上を見ると、雑誌を傍らに置いてやって来た。クッキーを見て、父は母に尋ねる。

「　　？」

「　　」母は答えた。「　　、　　」

そう言うと二人はいっしょに笑った。

弥生もにこにこと笑う。

もう、慣れた。

実際どうにかなるのだから不思議なものだ、と弥生は思う。午前中は怪しんでいるかに見えた父の顔も、今やいつもと変わらない。単に自分が落着いただけなのだろうか。多分そうだろう。父親とはいえ他人が何を考えているかなど、見ただけでは所詮分からないものだ。自分自身の内面の不安が、父の顔に映し出されていただけだったのだ。

父が何を話しているのか、母が何を求めているのか、差し障りのない程度には十分分かる。分からなければ、首肯しておけば済んでいく。ほどほ

どに相づちを打ち、ごまかしごまかし振る舞えば、何とでもなるものだ。そうと分かれば、夏の帰省の一日を平時と変わらず楽しむことが出来る。

相変わらず若干の空しさが残るが、それだけだ。

紅茶をすすりながら、弥生は両親を見ていた。二人とも楽しそうに無音で笑い、無音で会話している。見る限り、弥生の知るいつもの光景だ。いつもなら弥生も、その中に入って喋って、笑って、同じ空間にいる。

だが今の二人の姿は、まるでテレビドラマの団欒のようにどこか遠かった。

同じ部屋の、同じテーブルで両親は話している。手を伸ばせば届く。ところが弥生にはどうしても、その二人が自分と違うところにいるように思えてならなかった。よその家のリヴィングを、窓越しに外から眺めているかのようでもあった。

要するに、自分と関係ないのだ。

声が聞こえないだけなのに。

父がクッキーをかじる音だけがよく聞こえた。そして父は弥生の方へ向き直り、言う。

「　　。　　。　　？」

そうして父はクッキーの缶を弥生に向かって押した。弥生は遠慮なく受け取って食べる。父は思い出したような顔をして、母に改めて話し始めた。

「　　、　　」

すぐに引き込まれて母は聞く。微笑みながら頷き、しばしば相づちを打つ。そしてまた二人して笑う。

弥生はそんな二人を見ながら、じっと考えた。

家族揃ってのおやつは終わり、母は食器を片付け、父は雑誌を持って二階の書斎へ赴き、弥生はまだ食卓の椅子に座ったままだった。座ったまま、ゆっくりと息をつく。そして、一人頷く。

――いつまでもここにいるわけにはいかない。

弥生は立ち上がると、二階の自室へと向かった。

窓の外は薄暗くて、電気を点けないままの自分の部屋は、ひどく寂しげに見えた。小学校の頃から使っていた勉強机の上で、弥生はメモ用紙に鉛

筆で書いた。
「お父さん、お母さん、ちょっとゆうちゃんのところへ行ってきます。遅くなるかも知れませんが、心配しないでください。　弥生」
鉛筆を押さえにしてメモを机の上に残すと、弥生は隣室にいる父に音が聞こえないよう、注意してドアを閉める。階段も静かに降りた。
キッチンにいる母にも気づかれないよう、弥生は靴を履いた。後ろを振り返り、誰もいないことを確かめてから、そっと玄関の扉を開けた。
外は、霧で何一つ見えなかった。
一歩外に出る。そして家の中を見た。吸い寄せられるような鮮やかな記憶がその中に見えた。
まだ、戻れる。
弥生は目を瞑り、息を吐く。
振り返ると家の中へ向かって、はっきりと、大きな声で、言った。

「お父さん、お母さん。行ってきます」

静かに、ドアが閉まる。

13.

ひとみは今、崇嗣と、崇嗣の父の妻と、いっしょに霧の中を歩いている。
――何でだろう。
そう思いながら、ひとみは気取られないよう横の二人を見た。崇嗣は、傷だらけの顔がいかにも痛々しかった。そこかしこが内出血して赤らんでいる。鬱ぎ込んだ顔に見えるのが、事実なのか腫れのせいなのかはよく分からない。
そしてその幸奈とかいう女性は、先ほどから黙りこくったままだった。ひとみはまだ、彼女の声も聞いていない。崇嗣に慰めの言葉をかけるでもなく、ひとみと目を合わすことすらなかった。
崇嗣を心配して訪ねたあの玄関先で、ひとみは考えられる限り最悪の状

況に立ち会った。　崇嗣の父親はありゃ、とかいやあ、とか意味のない言葉を呟いて、へらへらとごまかし笑いを浮かべながら早々に退却していった。十年くらい前、ひとみが初めて見た頃から何ら進歩がない、軽薄な人間だった。胸がむかついたが、あんな状況では非難することも出来ない。

やがて奥から神主の妻と、それに続いて若い女が、おずおずと出てきた。女はひとみより二、三歳くらい上の細面の美人で、最初何者なのかひとみは分からなかった。そして分かると、先ほどのへらへらした男のことがますます厭になった。

即座に事態を見て取った神主の妻は、ひとみに向かって口早にこう言った。

「あれまあ。崇嗣どうしたん、転んだの？　えらい怪我して。まあまあ。ちょっと、ひとみちゃん、幸奈さんも、この子宗像さんの、診療所連れてったってくれない？　こっちは私がなんとかしとくから。ねえ」

それで、今三人で歩いている。

頭が痛くなりそうだった。

こんなことを、あの頼りない若先生にどう伝えたらいいのだろう。ひとみは考えた。どう見ても、転んでこんなになる訳がない。神社の石段をうっかり転がり落ちたとでも言うか。いやそれより、何で私がこんなこと考えなきゃならないんだ。

ひとみは今度は、堂々と幸奈を見据えた。それでも彼女は変わらず無言で、うつむき加減の暗い、無気力な表情を浮かべたままだった。何も考えていないようにも見える。

――腹が立つ。

ようやく、霧に包まれた診療所に着いた。休診札はかかっていないが、カーテンが閉まっていて、人のいる気配もなかった。ドアを押すと、鍵は開いていた。三人は中に入る。

受付には普段なら若先生の奥さん、つまり陽の母親が座っているが、今日は誰もいなかった。ちら、と幸奈に目をやると、彼女は壁紙に寄った皺をぼんやりと見つめていた。はぁ、と露骨にため息をついてから、ひとみは大声を張り上げた。

「すいませーん、誰かいませんかー、すいませーん」
はーいはいはい、と遠くから声が聞こえ、スリッパの音が近づいてきた。
奥から顔を出したのは、若先生だった。
「やーごめんね、昨日から朝っぱらから、ちょっと色々と立て込んでてね。あれ、崇嗣君。どうしたのその怪我」
そう言って、彼はひとみを見た。ひとみはあえて目をそらした。続いて、彼は幸奈に応えを求める。しかし彼女は、困った顔をするばかりだった。気まずい静かな空気が、待合室に流れた。
返答が得られないので、若先生は戯けるように三人の顔を見比べる。崇嗣本人も、むくれた顔をしたまま何も言わない。しまいに諦めた若先生は肩をすくめ、まあ上がって、と言って奥を示した。
若先生の後について三人は歩く。診察室には電気も点いていなかった。壁のスウィッチを押しながら、若先生は言い訳した。
「ちょっとねえ、今朝方から色々あって、今うちの奴も春文も出払っちゃってるもんだから」
喋るとやたら酒臭かった。ひとみは顔をしかめた。
「ああごめんね、昨日の今日で。まあ、島の人みんなそうでしょ。酔ってはいないから気にしないで」
そう言いながら、若先生は革張りの椅子に腰掛けた。前に崇嗣を座らせる。そうして崇嗣の顔に両手を添えて、若先生は呟いた。
「ひどいなーこれは。鼻も切れてるねえ。頭もあっちこっちこぶになってるし。何やったの、こんなに」
そう言うと、若先生はまた、おとな二人の顔を見る。
おおかた分かった上で訊いているな、とひとみは思った。
ひたすら下を向き、落ち込んだ顔のまま動かない幸奈を見た若先生は、ひとみに向かって胡散臭そうに尋ねた。
「こちらは？」
ひとみが半ば皮肉混じりに言葉に迷い、あーええと、などと言っていると、意外なことに幸奈自身が、小さいながらも確かな声でこう応えた。
「崇嗣の、母親です」
思っていたよりも意志の強そうな声だったので、ひとみは驚いた。若先

生は一瞬黙った後、はあ、へえそれは、と気のない声で無意味な言葉を吐いて、後はもう何も問わなかった。
若先生は、崇嗣の顔の赤くなっているところを軽く親指で押した。
「これ、痛い？」
崇嗣は眉間に皺を寄せて応えた。
「　　」
口をへの字にして、若先生は崇嗣を見た。そして今度は、顎の辺りを押した。
「ここは？」
「　　」
歯を食いしばって崇嗣は応える。痛みを堪えながら喋るように、口を小さく動かしていた。しかし、何も聞こえてこなかった。若先生は、口の端を吊り上げた厭味な顔になって言った。
「今度は君か。何かの流行りか？　ほら、ここは？」
そして、青黒く腫れ上がっている頬骨の辺りをかなり強く、ぐっと押した。
途端に崇嗣は飛び上がるように席を立ち、若先生の手を払うと、怒りで顔を真っ赤にして叫んだ。
「　　」
崇嗣の息は荒い。しかし、叫んだ口は静かなままだった。
部屋全体が白けた雰囲気になった。
参ったね、と言わんばかりの顔でため息をつくと、若先生は机に片肘をついた。頭を掻きながら言う。
「怪我の方はまあ、いいとして。困ったものだね、こういう態度も。こっちも診察しているわけだからさ、いくら患者さんとはいえ、協力してもらわないと」
崇嗣はそんな様を見て、おおよそ言われていることに見当をつけたらしく、椅子に座り直しはしたものの、今度は若先生を睨みつけ始めた。じっと、微動だにしない。傷だらけの彼の顔には、おとなにはない奇妙な凄味があった。それに耐えきれなくなったらしく、目をそらした若先生は、仕舞いにボールペンを手にとって、頻りに机をつつき出した。神経質な振る

舞いだった。
崇嗣の方をろくすっぽ見ずに、若先生は言い続けた。
「反抗期にはねぇ、よくあるんですよこういうの。何て言うのかなあ、意識的無意識的含めて、こう、気持ちが直接行動に出ちゃう。普通我々おとなになるとね、まあその辺は建前腹芸込み込みで、事荒立てないように振る舞うもんだけども、そういうことが出来ないんだよねえ、こどもって。まあこういうのは児童臨床心理の仕事だから専門外なんだけど。第二次反抗期っていうのは何かと面倒な症状が出るもんでね、幼児に次いで扱いにくいというか。我々も気を遣うわけですよ。こっちが言うことにことごとく嘘付いたり、無視したりね。異常行動をとってこちらの気を引こうとしたりする。まあ典型例です。それでもって当人は無自覚だったりするものだから始末が悪い。でね、お母さん？　対応としては、一般的にですけど、親がきちんと話を聞いてあげる、双方共に納得するまで話し合う、お互い無理をしない、と、つまんないことですけど、やっぱりそういうことですねえ。ちゃんと成長していけば、普通は十八、九で治まりますから。難しい年頃ですけど、大抵の子はそうやっておとなになるものですし」
「あんたアタシのこと馬鹿にしてるでしょうッ」
馬鹿らしくなって若先生の話を聞き流していたひとみは、突然の大声に仰天した。話を遮られた若先生も、自分が言われたのかと思ったか、貧乏揺すりを止めて振り向いた。
幸奈が、崇嗣の背後で顔を真っ赤にしていた。
「二年前からそうだった。どんなにアタシが一生懸命あんたに話しかけても、すぐどっか行く。何とかしてあんたに好かれたいと思って努力してるのに。全ッ然言うこと聞いてくれなくて、アタシ毎晩悩んで、泣いて、でもあの人、全然相談に乗ってくれなくて」
崇嗣に向かってほとんどつばを飛ばすように、幸奈は叫び続けた。
しかし崇嗣は、背を向けたままだった。
気づいていないようだった。
「もうどうしたらいいのか分かんない。アタシが後妻だから気に入らないの、それともケバいから？　化粧も薄くして、髪も染め直したでしょう？　それでも駄目なの？　どうして欲しいわけ？　ねえ。無視？」

若先生の長広舌の途中から、崇嗣は何もかも閉ざしてしまったかのようにそっぽを向いたままだった。だから、周囲の変化にも気付かない。もちろん幸奈にも、気づいていなかった。

崇嗣の背中に向かって、幸奈はあらん限りの声で叫ぶ。

声はどこにも届いていない。

「ねえ、ちょっと、返事しなさいよ。何？　無視？　聞こえないふり？　嘘でしょう？　何なの？　あんた何なの？　わけ分かんない。ああもういや。アタシもう我慢できない。もう、いい加減にしてよッ」

そう言って幸奈は崇嗣の両の肩を掴むと、椅子ごとぐるりと半回転させた。

予想もしていなかった突然の暴力に驚いて青い顔になった崇嗣は、目の前の幸奈を見て愕然とした。慌てて逃げ出そうとする。

しかし、もう遅かった。

「この」

右手を大きく振りかぶった幸奈は、そのまま全力で崇嗣の左頬を張った。

ぺち、と情けない音が鳴った。

ひとみも若先生も、唖然として動けなかった。

顔中傷だらけの崇嗣は、それでもひどく痛がってこう言った。

「　、　、　、　」

だが幸奈には、何も聞こえていない。

振った手の甲をたたきつけるようにして、右頬を叩く。今度は鈍い音がする。

往復ビンタが続く。貧相な音が、何度も何度も鳴る。

「何か言いなさいッ、アタシが、あんたの、母親なのッ」

うめき声を上げて、幸奈は崇嗣の顔を打ち続けた。ほとんど無抵抗の崇嗣は、張られるままに首を右へ左へ振っていた。泣きながら、崇嗣は言った。

「　　、　　」

ぺち、ぺち、と貧相な音が繰り返される。

部屋は、奇妙に静かだった。

ここにいたってようやくひとみは我に返り、幸奈に後ろから飛びついた。

やめなさいッ、と耳元で叫んで、両腕を羽交い締めにする。しかし、何かを諦めたように暴れる幸奈にたちまち跳ねとばされる。ひとみは壁に腰を強く打ちつけて、うずくまった。

若先生はいつのまにか部屋の隅で縮こまり、ねえちょっと君やめなさい、怪我するよ、と場にそぐわない言葉を小声で吐いていた。もちろん幸奈が聞くはずもない。

ひとみは、頭を振って立ち上がった。もうこんなこと、本当にうんざりだ。

けれど一方で、幸奈の悩みは他人事とは思えなかった。

――こどもたちが分からなくなったのは、いつからだろうか。

ひとみは必死で幸奈にしがみつく。そうして彼女の動きが一瞬とぎれた隙を突いて、崇嗣は横飛びに逃げた。転げるように、彼は診察室の出口へ向かった。

戸口を過ぎる瞬間、崇嗣がこちらを見た。ひとみと目が合った。

彼は、裏切られた顔をしていた。

廊下を駆ける音、つまづく音、靴を慌てて突っかける音、ガラス戸を勢いよく開ける音。

そして崇嗣は、どこかへ消えた。

## 14.

陽は、齋夜の家の前に立った。

朝、家を出てからもう何時間になるだろう。何も考えず、島のあちこちを彷徨い歩いた。汗と霧で服が身体に張り付き、気持ち悪かった。

すぐそこの塀には、「鳴橋（なりはし）」と書かれた表札が掛かっている。小さい頃から数限りなく、陽はここへ来た。無心に目的もなく、あるいは遊びに、喋るためだけにも来た。それこそが、楽しい、という気持ちだということすら、まだあの頃は知らなかった。

――ここへ来ることに、大切な意味を感じ始めたのはいつだったか。

玄関のブザーを押す。すると、まず最初に齋夜のお母さんが出てくる。柔く笑ったその人に連れられて家の中に入れば、どこかしらでおばあさんと会う。日によっては、書斎から出てきた齋夜のお父さんとも会う。ばさばさとした白髪交じりの、あっさりした性格のおじさんだ。でも、そうしているうちに齋夜が駆けてくる。そして齋夜は、あの笑顔を浮かべる。

――今はもう、みんないなくなってしまった。

目の前の家からは、静けさしか感じられなかった。

少しの間逡巡した末、陽は結局、その静かな家に背を向けた。何故来たのか、自分でも分かっていなかったからだ。陽は歩き出す。歩き出してから、自分の行き先を考える。行き先を考えてから、目的を考える。考えて、ふと思いつく。

――もう一度、あの場所へ行ってみようか。

そうして数歩歩いた時、背後で玄関の開く音がした。振り返ると、薄い膜が張ったような霧がすでに齋夜の家を覆っていた。声が聞こえた。

「陽？」

そして人形のような小走りで、齋夜は霧の中から陽の元へやって来た。

立ち止まり、陽の顔を見上げる。そして小首を傾げた。

けれど、何も言わない。齋夜はじっと、しばらく、陽の顔を見つめる。

いつもそうだ。

それが陽は昔からずっと、面映ゆかった。

「どうしたの？」

齋夜は言う。

「いや」言葉を選ぶ。「もう行くところがなくて」

「昨日のままなの？　やっぱり」齋夜は尋ねた。「声聞こえないまま？」

「ああ、齋夜は知らないのか」

「うちおばあちゃんしかいないし、おばあちゃん起きないから」

齋夜は少し、心配そうな声を出した。陽は目を落とす。

「はっきり確かめた訳じゃないけど、昨日のまんまだよ。たぶん。親父も、お袋も、兄貴も、近所のおばさんも。ひとみ先生も」

「そう」

細い声で齋夜は応じた。そしてうつむく。

幾度かまばたく。
「齋夜は」陽ははっきりしない声で訊いた。「齋夜はどうした？　出かけるのか？」
「うん、ちょっと、お買い物、のつもりだったんだけど」見てみると齋夜はいつもの買い物袋を下げていた。「でも、無理かな」
「要領よくやれば何とかなるんじゃないか」そこで陽はおどけてみせる。
「齋夜なら普段から無口だし」
「ん」すぐに齋夜はむっとした顔になる。
「冗談だよ」陽は微笑んだ。「どうしても要るのか？　俺が代わりに行こうか」
「いいよ。大丈夫」
齋夜はそう言った。機嫌はもう直っていた。
会話が途切れる。
陽と齋夜には、しばしばこうした間があった。意味のない沈黙が不意に訪れる。どちらも生来よく喋る方ではなかったから、話が尽きると自然と黙ってしまう。
けれど陽は、それが心地よかった。
何も話さず、陽は齋夜を見つめた。
大きな黒目がちの瞳が、陽を見上げる。小さな唇は薄く開いたまま、何も言わない。それは、何かを言いたいのに上手く伝えることが出来ないもどかしさを、いつもたたえていた。不機嫌になるとたちまち曇る気分屋の顔だが、今は困ったような、喜ぶような、優しい色を浮かべていた。
齋夜はそして、あの笑みを見せた。
気付かなければそのまま消えていきそうな、最期に抱く笑顔だった。
幼い頃から変わらない。
その笑顔を見ると、
陽はいつも、どうしようもない気持ちになる。

どうしたらよいのか分からなくなって、
陽は齋夜を、強く抱きしめた。

棒のように抱きすくめられた齋夜は何も抗わず、そのままにしていた。
少しの力も緩めることなく、陽は齋夜を逃すまいとした。
離れない。
「陽」
齋夜が囁く。
あらゆることがもうどちらでもよくなった。
知る限りすべてのことは些末な問題に過ぎない。
失われたのは何だったのだろう。
問う必要はない。
陽は齋夜を、決して離さなかった。

15.

ぼくは不確かな足どりで、どことも分からず町を歩いていた。
今はまだ昼過ぎで、日は高くて暑いはずだ。
早く帰らないといけない。
陽が、家で待っている。
霧は刻一刻とひどくなっているようだった。外はもう、蒸し暑さがなければ夏とも分からないほどに視界がぼやけていた。こんな天気で、店なんか開けているのだろうか。
なんだか、商店街が遠くなったような気がする。
ふらふらと、ぼくは進んだ。
どこからか、川の水の流れるしぱしぱという音が聞こえた。
そして気付くと、もう商店街のアーチ前にいた。
商店街の中へ入ると、何もかもが霧で白く消されてしまったような光景が目に入った。
明らかにおかしかった。不自然だ。考えるまでもない。いくら夏とはいえ、霧が昼間から町に立ちこめるなんてことは、今までだって一度もなかった。本当ならもっと驚いて、慌てていいはずだった。ぼくだけでなく、陽も、みんなも、町の人たちも、不安がって騒がないといけない。

なのに、みんな不思議なほど平然としている。
ぼくもだ。
何かに考えを押しとどめられているように、ぼくらは落ち着いていた。
じわじわと魚屋さんが見えてきた。目を凝らすと、一応シャッターは上がっているようだった。魚屋のおじさんなら、いつだって客の話を聞いてるんだか聞いてないんだか分からないような人だから、やり過ごすことも出来るだろう。夕食用に適当に買って、さっさと帰ろう。ぼくはやや早歩きで、魚屋さんへ向かった。
すると突然、脇からすっと目の前に人影が入り込んできた。
驚いてぼくが身を引くと、その人影二人の顔が見えた。あのおばさん二人組、井戸さんと川邊さんだった。買い物の途中のようで、道の真ん中で立ち話でもしていたのだろう。声が聞こえないから気づかなかった。二人は目を丸くして、それこそ魚のような顔をしていた。
「　　、　　」
井戸さんがぼくを見て、面白がって何かを言った。厚めの唇がぱくぱくと動く。川邊さんが、井戸さんの肩を勢いよく叩いた。
「　　。　　、　　」
「　　、　　」井戸さんが言い返す。「
　　」
ぼくはいつの間にか、二人をじっと観察していた。
二人とも、変な色の割烹着を着ている。そこかしこに染みや汚れがこびりついていて、腕を動かす度に布がこすれ、ばたばたと音を立てた。今はそれが、はっきりと聞こえた。
「　　、　　」
井戸さんが、ぼくに向かって何かを言っている。けれど声が聞こえないせいで、ぼくは近づいてきた井戸さんの顔を、遠慮なく眺め続けることが出来た。
いい加減なパーマのかかった髪は傷み、錆びついた絡み合う針金みたいに見えた。額には、ひび割れた皺が何本も流れていた。
「　　？　　、　　」
曇った、古くさいフレームの、やたら大きな眼鏡をかけていた。澱んだ

目は一重で、周りはやはり皺だらけだった。
「　、　　。　　」
目尻から頬にかけて、いっぱい染みがある。ぼつぼつぼつぼつぼつぼつと、針先のような小さいものから大きなものまで、数え切れないほどの茶褐色が顔中に散らばっていた。
「　　」
鼻の頭から右頬にかけてには、何があったのか知らないけれどかさぶたが出来ている。治りかけのそれはだいぶ剥がれて黒ずんだもので、顔に蟻がたくさん張り付いているみたいだった。
「　　」
改めて見ると、唇はすごく分厚い。乾燥していてあちこち薄皮がめくれている。その奥には、黄ばんでがたがたに歪んだ痩せた歯が並んでいた。一本一本の隙間が広く開いていて、ところどころ虫歯なのか、黒く変色している。頬は皮がたるんで、口元に八の字型の皺が入っていた。ごわごわしていて毛穴がはっきり見えて、象の皮膚のようだった。太り気味の身体からは、古い田舎の家特有の臭いがする。服に染み付いているのか身体から立ち昇っているのか、それは分からなかった。声が聞こえないせいで、そんな細かな何もかもが、拡大されるようにやたらと目に付いた。
我に返ると、おばさん二人はぼくを間に挟むようにして立っていた。必要以上に近かった。
川邊さんも改めて見ると、面白いように同じ外見に見えた。
なんで、こんなにそっくりなんだろう。
「あの」
ぼくは思わず呟いた。もちろん、相手に届くはずもない。
「　？　　？　　」
井戸さんがそう言うと、二人は顔を見合わせ、哄笑した。理由は当然、ぼくには知れない。二人とも揃って身体をのけぞらせ、顔を歪ませる。笑い声は、何も聞こえない。なぜだか目を背けたくなった。二人から何か、どんよりとした重い空気を感じた。
声は聞こえないけれど、どこからかねちねちと妙な音が聞こえる。何だろう、とよく見てみると、二人の口の中からしているようだった。喋って

唇や舌が動くと、それに合わせてくちゃくちゃねちねちと音がするのだ。
普段は分からないのに、声が聞こえないせいでそんな音ばかりがはっきりと聞こえてくる。
くちゃくちゃ、ねちねちと。
気持ち悪い。
「　　、　　。　　?」
また何か喋っている。
向こうの声は聞こえない。こちらの声も通じない。
話すことが出来ない。
「　　」
くちゃくちゃ。
次第に二人がどこを見ているのかも分からなくなる。魚の眼だ。見開いた二人の目は、ぼくではないどこかを無意味に捉えている。大袈裟な身振り手振りは、意思疎通を拒絶している。動きも鈍重で、一体この人たちは何なのだろうとぼくは考え始める。何も通じない、何も分からない、何も見ていない。これじゃあまるで、
ねちねち。
まるで、

化け物だ。

前置きも無しにいきなり二人は爆発的に笑い始めた。
聞こえるはずのない巨大な笑い声が、ぼくの頭の中で反響する。
あはははははははははははは。
ぼくは踵を返すと、一度も振り向かずに全力で逃げ出した。